

Title	古活字版趙注孟子校記
Sub Title	
Author	高橋, 智(Takahashi, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1993
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.28 (1993.) ,p.139- 227
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松本隆信名誉教授追悼記念論集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000028-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

*注記・・論文中の写真について転載する場合は斯道文庫にお問い合せ下さい。

古活字版趙注孟子校記

高橋智

目次

- 一、緒言
- 二、前説
 - ・内閣本と広隆寺本
 - ・清家本との関係
- 三、各本略解
 - (一) 版種の分類
 - (二) 異植字版と修
 - (三) 校合作業の手順
 - (四) テキストの性格
 - ・七行本と八行本
- 古活字版趙注孟子校記
 - (一) 版種別による略解
 - (二) 現存本略解
 - (三) 存目

一、緒言

本校記は、斯道文庫論集第二四輯並びに第二六輯所載の、旧鈔本趙注孟子校記に引続くものである。文献の、可能な限りの

客観的な整理を志すゆえに、現存本の忠実な確認と、形態及び本文の、科学的分析が、この主たる目的である。

古活字版を整理するに際しては、形態上の分類識別に大きな困難を伴うわけであるが、特に、経書については、その内容上

注目すべき特異な存在であることも念頭に置かなければならない。阿部隆一博士の「慶応義塾図書館蔵和漢書善本解題」に収められる「中庸章句」の解説に、そのことは詳述されている。

古活字版という一群の出版物全体に亘る本文上の意義については、尚、今後の整理を俟って明らかにされるべきであろうが、ともあれ、趙岐注孟子については、その第一次的な整理を終えたものと確信している。

なによりも、原物の閲覧を第一とする本調査に御理解を賜った、龍門文庫川瀬一馬博士をはじめとする諸機関、諸先生各位の御恩情に対して、ここに謹んで深く感謝の意を申し述べさせていただきます、また本稿の全般に亘って御教示を仰いだ斯道文庫大沼晴暉師に併せて感謝申し上げます次第である。

二、前 説

(一) 版種の分類

校者は、次の如くにして古活字版の趙注孟子の版の識別を行

なった。すなわち、まず、川瀬一馬博士の分類を拠り所にして、その、第一種本について、慶応義塾図書館蔵本の原寸大複製を、白石克先生の御配慮によって得たのであるが、古活字版の比査に於いては、この実物大の比較資料が、絶大なる威力を発揮することを、あらためて実感することができた。次に第二種本について、東洋文庫蔵本の、A5判の紙焼写真を得て、題辭の部分と、巻第一〇の第一七葉の欠葉部分は、宮内庁書陵部所蔵二部のうちの七行本の、同様の写真を準備した。以下、第三種本は、静嘉堂文庫所蔵二部のうちの、松方文庫旧蔵本を、第四種本は、内閣文庫所蔵三部のうちの、積梵舜手沢本を、第五種本は、同じく内閣文庫所蔵の八行本を、それぞれ全巻A5判の紙焼写真にして基礎資料としたのである。

そして、川瀬一馬博士の調査された所在について、これらの複製を持参して、一葉一葉比較する作業を続けたのである。これは、昨今の便利な複製技術の恩恵の賜物と謂うべきであって、原本を移動し得ない故に、多大な苦勞を重ねられた先達の、しかしながら大いなる指標を与え続ける大成には、脱帽以外の何もかも為し得ないのである。

その結果、校者は、次の如き所見を得ることができた。その

一は、第一種本と第三種本・第四種本が同一群の活字を用いて植字されている、ということである。そしてその二は、第五種本のうち、宮内庁書陵部本と内閣文庫本が全巻に亘って異版であり、また、活字も別種であるということである。前者については、東北大学附属図書館所蔵の第三種本と第四種本を、同時に比較した時に、巻頭首題「梁惠王卷第一」の「惠」字が似かよっていることに気付いたところから、更に全巻を対照して、同一の活字を多く見出し、かつまた持参した第一種本の複製をもあわせ照合した結果、全巻に亘って異版であるこの三つのテキストの中に、全く同一の活字が使用されていることを確認し、同館の石田義光先生にも御確認を仰いだのであった。恐らくはかように、実物を一堂に会して比較しうる機会が与えられなかったならば、確認することができなかったであろう。後述するが、これは異植字版の關係にあると言えるのである。無論、川瀬博士は、「高木文庫古活字版目録」昭和八年、の中で、二本存するもののうちの新井政毅旧蔵本、すなわち龍門文庫現蔵本について、

前記一本と同種活字の異植後印本

と述べ、前記一本と言うのがやはり同じく龍門文庫現存の一本

で、校者の調査では、新井政毅旧蔵本が第三種本、「前記一本」が第一種本であるから、既に、第一種本、第三種本の異植字の關係は指摘されているわけである。また、「弘文荘古活字版目録」昭和四七年、に根本通明旧蔵の第四種本（現所在不明）をあげ、

活字は前出の今関正運版と同一だが

とする故に、今関正運版すなわち第一種本と第四種本の異植字の關係も、弘文荘反町氏によって既知の事実とされていたと言えるのである。

が、校者は、本校記を整理する際に、漠とした信念の勃起するを禁じ得ず、形態上の観点からも出版上の意義からも校定受容等テキスト成立状況を考ずる意味に於いても、この異植字の關係はことさらに強調しなければならぬ事実と信じ、いままた少しくその論証に贅言を弄し、それを反映するべく試みの分類を勇み行なってみたのである。

すなわち、この一群の活字を用いて作られたテキスト全体をA種と名付け、その中で版を異にする名種のテキストにそれぞれa・b・cという小文字を与え、第一種本をA—a種、第三種本をA—b種、第四種本をA—c種としてみたのである。使

われた活字の種類や数量に一個の出入もないとは勿論断言することはできないけれども、出版に携わった者が、この三種類にして極めて相近い存在であったことと、当時趙注孟子が相当に受容のあったことが、この分類によって想像できるのではないだろうか。実際、校記を参攷すればわかることであるが、版式同一なるこれら三種類は、同じ誤植を通襲している箇所がかなり見うけられるのであって、このことは前記二つの想像を確かなものとする根拠にもなるであろう。

ただし、附言するならば、誤植の箇所は、改版ごとに訂正されたり、逆に改版によって誤植してしまったりする場合もあるが、全体としてみれば、そこにより良いテキストを得ようとする一定の眼が存していたと理解するべきであろう。

次に、所見の第二である第五種本についてであるが、これはずとに長沢規矩也博士が「京都大学附属図書館所蔵古活字版漢籍目録」（復刊書誌学新三五・六号、昭和六〇年）の中で提起された如くで、八行本にはやはり二版あるのであって、しかもこの場合には同一の活字を見出すことができず、全く別種の活字を用いてそれぞれが植字されたとみてよい。従って、京大の「清一三三」の一本と宮内庁書陵部の一本は、他の八行本と別

版ということになる。図Ⅵ（イ）内閣文庫八行本（ロ）京大図書館八行本）を参照。そこでこの八行本に区別をつけて、内閣文庫本のグループにC種と、書陵部本のグループにD種という名を付けた。この二種の八行本は字句の異同に近似の箇所が多々見られるものの、C種本にはD種本以上に顕著な特色がみられるということは特記されてもよいだろうと考える。

第二種本は、便宜上B種とした。川瀬一馬博士によって下村生蔵の刊であろうとされ、また朝鮮活字に似るとされる。（新修成實堂文庫善本書目」平成四年）

後陽成天皇勅版は、E種とした。

以上、かくの如くにしてAからEまでの分類を試みたわけであるが、略解はこの種別ごとに行なうこととする。この分類は自らの都合のみによって敢て考案したままであって、「古活字版之研究」の分類がその大綱であることは言うまでもない。

（二）異植字版と修

異植字版という用語の定義を、あらためて長沢規矩也博士の「図書学辞典」にもとめると、

一部の東洋式活字印本の全部のページを、同種活字を使い

ながらも組み替えた本。注意 本文の第一葉、巻末、序文は、昔でも内容見本として余分に刷られたことがあったと見えて、その部分だけ組み替えられた伝本があり、これらを異植字版ということは、科学的には正しくない。これは、一種の補修本である。

ということであり、古活字版趙注孟子を分類するに際しては、まさしくこの定義に従わなければならない実例に出遇う。

既に述べたように第一種本と第三種本と第四種本は、全ページが異なる版ではあるが、使用された活字は同種であると言える。それ故に、これらは異植字版であると定められるわけである。ただし、使用された活字の全字についてひとつひとつを同定したわけではない。照合によって、全く同一の活字と認められるものを、各版の中に多々求め得ることから、これら三種類の伝本は同じグループの活字群から植字されたものであらうと推定するのである。

これを、第一種本に慶大本、第三種本に静嘉堂文庫蔵松方本、第四種本に同文庫沢氏本の図版を籍りてみると、例えば任意に図Ⅰ、巻第二第二葉表第四行「蹙類」の二字に注目する。「類」字は三本とも同一の活字、「蹙」字は松方本・沢

氏本の二本が同一の活字を用いている。また、図Ⅱ、巻第五第四葉表第三行「歎粥」の二字は三本とも全く同一の活字とみとれる。更に、図Ⅲ、巻第七第一九葉裏第四行から第五行にかけての三箇所の「瞽瞍」二字は次の様な排字となっている。

瞽瞍 瞽瞍 瞽瞍

慶大本 ○○ △△ ×× ○△×がそれぞれ同一の活字で

松方本 □△ ×○ △× あることを示す。□はこの葉に

沢氏本 ○○ △△ ×× は他に同じ活字がない。

慶大本は刷りが早期とみえてやや活字が細めであるが、慶大本の原寸大複製すなわち実物大であるものから、この六個の活字を切り取って静嘉堂文庫に赴き、増田司書の御教指によって、原本のこの活字の裏側に、同一活字と目される慶大本複製から切り取った活字の小紙をあて、光に透かしたところピタリと一致したので、この表に示す推定にはほぼ誤りがないと思われる。

以上、これらの実例によって、各版の中に同一活字の存在することは明らかであらうし、同時にこの三種の版を異植字版と称することも異論のないところであらう。校者の試みた分類のA種とは、かようにほぼ同一群と思われる活字のグループを指

し示すのである。無論、全巻全葉に亘って異版であるという事実は、校者が全所在本について比査し終えたので断言できるし、同一活字であると認定し得る箇所は枚挙にいとまがない。

しかしして、この異植字版と区別しなければならぬところの所謂補修本については、第二種本と第五種本、校者の分類で言えばB種本とC種本にこれを見る。

第二種本(B種本)に於いては、大谷大学の神田本がこれにあたる。川瀬博士がつとに紹介された石井積翠軒旧蔵のもの。

巻第三の第一葉、第二葉、第五葉、第七葉の四葉が他の所在本と異版であつて、他の葉は全て同版なのである。その、巻第三の第五葉が異版であることをみるために、東洋文庫本と図版にて比較してみる。図Ⅳ、第四葉裏すなわち右半葉は掲載二本とも同版、第五葉表すなわち左半葉は異版であることが明瞭である。ただ、全く同一の活字を用いている箇所、例えば第一行に於いては「畏」「賁」の如き、もあるので注意を要する。何故にかよふなる事態が起るのかは今論ずるところではないが、いずれにせよ字句に異同がない点で、テキストの成立に於ける本質的な研究には大きな影響を及ぼすことはないと言える。

第五種本(C種本)は、阿部隆一博士が台北故宫博物院蔵本

の首葉に発見されたのであるが、「孟子題辭」の第一葉と第三葉に異版が存在していることがわかつた。内閣文庫本に比すると、故宮本、京大人文研蔵本の異版の様子は次のようである。

内閣 故宮 人文

第一葉 ○ × × ○は○どうし、×は×どうしが

第三葉 ○ ○ × 同版であることを示す。

謂わば、人文研蔵本が通修のような格好になっているのであるが、とはいえこれら三本の前後関係を一概に論じることはいきまい。図Ⅴをみれば、右半葉が異版にして、左半葉が同版であることがみてとれる。

このような数葉のみの異版の存在は、ややもすれば異植字版と混乱を来す因となりかねないので、古活字版の調査に於いては、最も慎重に注意を払わなければならない要素であると言える。それは、この所謂補修本をも異植字版に加えてしまったならば、当時に於いてこの書物が出版されなければならなかった受容の度数について、夥しい量の誤差を生じてしまう結果となるからに他ならない。

趙注孟子の例にあつては、この補修は、刷り置き等を用いた一種の補配的な性格が強い。

㊦ 校合作業の手順

以上の分類を踏まえた上で、字句の異同を調べるのであるが、この際、各分類を代表する伝本をひきくらべればよいわけである。その代表者を示せば次のようである。

- 第一種 (A種 a) 慶応義塾図書館蔵本 (慶大本)
- 第二種 (B種) 東洋文庫蔵本 (東洋本)
- 第三種 (A種 b) 静嘉堂文庫蔵本 (松方本)
- 第四種 (A種 c) 内閣文庫蔵本 (梵舜本)
- 第五種 (C種) 内閣文庫蔵本 (内閣本)
- 第五種 (D種) 宮内庁書陵部蔵本 (書陵本)

下の括弧内に示した名称が校異中に用いた略称である。

この校合作業において、最も注意を払う必要があるのは、後人による墨筆の訂正である。似かよった字形の字が誤植されている箇所を、欄外や行間に批校するのではなく、加筆したり、墨を削り去ったりして、その活字の一部分乃至は全体を書き改めてしまうのである。従って、このような字は容易に写真では印か写かの分別ができない場合が多い。

この例は、静嘉堂松方本や、清家本による釈梵舜の綿密な書

入れがなされる内閣文庫本にしばしば見られる。「大」と「太」字を比較して「大」字に点を加えたり、「容」と「客」を比較して「容」を「客」に巧みに改めたり、「介」を「芥」としたりするのが即ちこれである。

なお、最も誤植が多い第五種 (C種) 本については、内閣文庫本が欄外に批校を書入れているのでこの苦を嘗めずにすんだが、校者の未だ実物を調査し得ぬ台北故宫博物院蔵本には、写真でみる限り甚しき実例が挙げられる。「困」を「因」に、「戴」を「載」に、「治」を「冶」に、「短」を「矩」に、「興」を「與」に、「可」を「何」に、等々である。勿論、正しい字に訂正しているわけだから読む者には有難いことであるが、書誌学上の資料として扱う場合には労多くして益少なき調査を余儀なくされることとなる。

そして、あくまでも古活字版が組版された時点での文献を整理する作業であるから、古写本の場合がその書写者と校定者という関係、つまりは文献成立とその校定に密接な関わりが想像されるのは、この古活字版に於ける書入れ校定はかなり性質を異にするゆえに、これらの訂正批校は、本校記には含まれない。確かに、古活字版の出版と、それに加えられた批校書入が

極めて近しい時に在る場合もあるが、校者の観るところ、趙注孟子については、その出版と批入者に特別な関係を見出すことはできない。

(四) テキストの性格

○七行本と八行本

抑々、本校記は、各本の性格に色分けを施そうとするための試みではないのであるから、特定の結論を提示する附会は避けなければならぬのであるが、テキストの性格と名付くるに憚りのない極く顕著な特色のみをここに注記して、聊か参攷に付しておこう。

経文のみの勅版を除けば、版式上七行本と八行本に大別されることは既に述べてある。この違いが、どのような出版の事情を物語るのかを闡明にすることはできないが、印刷文化史上、時代が下るにつれて行字数が増加する傾向にあることと、恐らくは無関係ではなからう。

更に、そればかりではなく字句の異同もまたこの版式上の大別と軌を一にする様相を見て取ることができるのである。無論、校者はこの事を以てただちに両者の依拠せるテキストの相異を

云々するといふのではない。ことはそう単純ではなからう。

この七行本と八行本の字句の異同の様子を、少しく詳細に観ずるならば、明らかなる誤植と思われる字を、七行本どうしが、或いは八行本どうしが承けつぎ合っている姿が目につくのであって、文意を違える程の異同にくらべてこのような箇所は圧倒的に多い。

例えば卷第八離婁章句下「逢蒙学射至乘矢而後反」章の校記、

「其僕曰廋公之斯也」と「其僕曰廋公之斯衛」の二条の異同を見れば、七行本が誤植を承けつぎあっている好例を識り得よう。すなわち、僕と廋が転倒しているわけである。同じく卷第八「公都子曰至是則章子已矣」章に於ける

「不相遇也」

の条の異同は、八行本がともに遇を過に作って誤植を同じくしている例である。

こうした例は、各所にあらわれていちじるしい様相を呈している。

また、卷第九万章章句上「万章問曰至此之謂也」章の、「身為天子」

の条の異同は、誤植というのではなく、七行本は同じく作るが八行本が「身既為天子」と既字が加わっている。すなわち七行本と八行本の内容上の相違を示す例であると言えよう。

勿論、これらの例に相当しない場合も数多くある。慶大本のみは七行本の内でも群を抜いて誤植が多いし、松方本と書陵部本が同じ誤植をしている箇所が卷第十二告子章句下にいくつも見られるというように、七行本と八行本の何らかの交流も十分に考えられることである。

この事実をもって、恐らく許されるであろう推測は、内閣本をして代表とされる八行本と、書陵部本をして代表とされる八行本とは、出版に際して密接に関係したということであり、そして、活字の風格などから更に想像を加えるならば、後者すなわちD種本が後出ではなからうかと考えられるのである。とはいえ、D種本が最も校訂に行き届いているかと言うと、必ずしもそうではない。また、内閣本すなわちC種本とこのD種本との間に生じた溝は、七行本の関与によるものであろうとも想像されるのである。

次に、七行本について推測を加えれば、活字群を同じくするA種のa・b・c三種が密接であるの言うまでもなく、B種

もまたこのA種と近密な関係によって出版されたであろうと考えられる。そして、慶大本を代表とするA種a本が早期の印に係り、順次b・c本と組版されていったであろうことも、誤植の状態や活字の印面などから言及されてもよからう。B種本は最も誤植が少ない。A種a本は、今関正運の、B種本は、下村生蔵の、それぞれ四書合刻の一であると言われているが、校合によって知り得る両者の関係は、いずれかがいずれかに拠るか、乃至は同一の校訂本に拠るか、というぐらいに近いものであるということである。

こうしてみれば、結局のところ、川瀬一馬博士の提示される五種の分類が、すなわち出版されたところの順次を意味する分類でもあろうと、改めて確認される次第である。

○内閣本と広隆寺本

さて、八行本どうし、すなわちC種本とD種本が近親関係にあるであろうと推測したのであるが、更にC種本すなわち内閣本が、D種本と違うやや際立った特色を示しているということを通じて述べておく必要がある。すなわち、広隆寺本との相似点についてである。

広隆寺本とは、本論集第二四輯「旧鈔本趙注孟子校記(一)」

(以下「校記(一)」と、又第二六輯の「旧鈔本趙注孟子校記(一)」を以下「校記(二)」と略記す)所載の一本で、本邦現存古鈔趙注孟子の、書写年代が最も古いと推定されるテキストである。この広隆寺本は、「校記(一)」を参照すれば明瞭である如く、元良本や伊佐早本と近似する異同が見られるが、他の伝本には全く見ることのできない異同も多く、注目すべきところがある。

ここに、C種本たる内閣本が、広隆寺本と相似する箇所的主なもの列挙してみよう。以下は、古鈔本では広隆寺本のみ、古活字版では内閣本(C種)のみにみえるかつは両者共通した異同である。

卷第一梁惠王章句上

○梁惠王曰至民飢而死也章

王復曰政殺人無以異也 広隆寺本内閣本殺作教。

○孟子見梁襄王至誰能禦之章

魏之嗣王也広隆寺本内閣本魏作梁。

○齊宣王問曰至未之有也章

天下可転之掌上言易也 広隆寺本内閣本転作運。

所大欲者耳 広隆寺本内閣本耳作也。

卷第二梁惠王章句下

○齊人伐燕取至可及止也章

我蘇息也 広隆寺本内閣本也作而已。

卷第三公孫丑章句上

○公孫丑問曰至有盛於孔子也章

無形而生有形 広隆寺本内閣本生下有於字。

○孟子曰人皆至不足以事父母章

情発於中 広隆寺本内閣本情作以。

知皆廓而充大 広隆寺本内閣本知作智。

勿論これ以外にも、C種(内閣本)とD種(書陵部本)がともに広隆寺本と同じに作っている例や、D種のみが広隆寺本と同じに作ったり、また広隆寺本元良本等が、これら八行本と同じに作っている例は多く、それは、校記をひきくらべてみるだけで容易に観察できる事実である。

いふなれば、広隆寺本と内閣本(C種)という二つの交り合った円があつて、そこから波紋の如く幾つかの円(テキスト)が広がるように囲繞しているというような様子を思い浮べることができよう。

ならば、この事は一体如何なる意味を有するのであろうか。

それは、一概に内閣本が広隆寺本に依拠して成立したと断ずることはできないが、広隆寺本に近い伝本、もしくは広隆寺本と同系の祖本（宋版系）に依拠しているものと考えてまちがわないであろう。阮元の校勘記を考ずれば、広隆寺本等にみる一連の異同が、十行本以下の注疏本系のそれに近似していることもやや特徴的である。しかしながら、広隆寺本の源流は、現存する宋版以外の別種の宋版に遡り得るに充分な現存本との異同を示していると言えるのであって、「校記(一)」に示すごとく台北故宫博物院蔵の養安院本、大東急記念文庫蔵の東急本等、いずれも現在佚したそれぞれ別個の纂図互注（重言重意）の宋版を底本とし、また五山版によって遺形をとどめた音注孟子の宋版が存在したことなどは、広隆寺本を校訂する際に用いられた、又他の、宋版孟子趙注が存在したであろうことを推測せしめるに不足ない事実であると言えよう。

「校記(二)」に示す足利本をみても、その書入に「原本」「小板」「印本」等の表現が見え、その実体が、こういった類の宋版であったろうことは想像にかたくない。

そして恐らくは、古活字版C種本は、かくの如き宋版あり鈔本ありといった環境の中から成立したことは明確であり、その

同じ環境に広隆寺本も存在したと考えるのが妥当かと思われる。内閣本と広隆寺本は、兄弟の如き関係であって、親子の關係ではあるまい、というのが要するに校者の揣摩臆測である。

○清家本との関係

清原博士家が、累世の学を承けて、清原宣賢以後、際立って孟子講読に力を注いでいたことは、当家の校定鈔本や所謂講義体の抄物、また旧蔵本への批入書入等の資料を見ることによつて、窺い知ることができる。今は、そのことを述べる場ではないので詳述はしないが、古活字版趙注孟子の成立に、こうした清原家の学風が大きな影響を及ぼしているであろうと考えるのも、また当然のことであろう。

また、孟子の本版が、四書の一という企図を持ったものであったといわれるが、朱子学が輸入されて漸く四書の講読が普遍化されようとするこの時代にあつて、四書の一とは言いがら、依然趙注（古注）によるテキストとして本版が存在したことは、この後すぐに四書集注が世を風靡する状況から考えてみても、全く特異な一時期を画した現象であつたと言わなければならない。

古活字版にあっては、孟子以外の他経についてもこれはしかし、朱熹の新注によらず、古注によって出版されているのである。大学・中庸が新注によって出現したのがむしろ特殊に思えるくらいである。

ともあれ、事実のみを語ればこういう事になるだろうが、やや想像を逞しくするならば、この背景にはやはり、清原家の、伝家の趙注を重んじる力が屹立していたと考えられようか。

既に清家が古くから朱子注を参勘していたことは、阿部隆一博士の研究〔室町以前邦人撰述論語孟子注釈書考〕本論集第二・三輯〕で明らかにされている。

しかしまた、「先哲叢談」に、林羅山（天正一〇年八一五八二）明暦三年八一六五七）が十八歳（慶長五年）の時に朱子集注を講じて叱られたという逸話があって、

世未有奉宋説者、羅山年十八、始説朱子集注、心服之、遂聚徒講朱注、清原博士議之曰、自古無勅許、則不得講書、朝紳猶然、况処士抗顔講新説、不可不罪也

このような風潮が当時あったことも、ひとつの材料として考え入れるべきなのかも知れない。

ともあれ、清原家が大宗とした累世の家宝趙注孟子は、宣賢

手写手定の、「校記(二)」に示す京大本にその姿を見ることができ。そしてこの京大本が、本古活字版と如何なる関係を持っているかを観察することによって、いささかなりとも清家本と古活字版の関係という問題を解く糸口を見出し得るのではないかと考えるのが一般であろう。

しかし、既に述べたように、八行本にあっては清家本と一線を画す鈔本と共通性を有するのであるから、七行本について京大本との共通性を見出し得るであろうかと焦点を絞ってみると、清家の証本を以って、綿密な校合書入を行なっているA種c本の梵舜本を通覧しても明らかかなように、必ずしも清家本を祖本としてはいないのではなからうかという実例にしばしば相違するのである。若し、清原博士程の権威を以って、その出版に直接手を加えたとならば、一字一句を忽にすることなく、しかも容易に家本の字句を改めたりはけしてできるものではあるまい。

卷第九万章章句上の首章、

「三十在位在位時」

の一句について、清家本は三を五に作るのであって、古活字版七行本が二に作るような現象は、清原博士の手によっておこり

得ることではないように思える。

卷第九章章句上、「威丘蒙問曰至不得而子也」章で、

「書尚書逸篇」

の注文五字が、清家本には無いが古活字版にはある。また、

卷第一三尽心章句上、「孟子曰君子至仁民而愛物」章で、

「不知人仁」

を清家本が「不加以仁」に作るのを古活字版は各本が「不得与人同」に作っているのなどは、甚だしい相違の例である。

とはいえ、卷第二梁惠王章句下、「滕文公問曰至強為善而已矣」章の、

「自強為善法」

の如く、清家本が「自強為善」に作り、内閣本を除く古活字版各本が清家本と同様に作っているような、いわば古活字版と清家本の共通点をも見出し得るのである。

従って、要するに、比すれば比するほどに、私観が入り乱れて結論を出し得ないというのが真実の印象で、校者は、敢えて言えば、清家本に影響を与えた宋版が、古活字版にも色濃く反映されているというような漠然とした想像をなし得るのみで、清原博士が直接に古活字版の校訂に関与したという印象は強く

はしないというのが実感である。

総じて言えば、古活字版の趙注孟子は、日本に於ける中世までの孟子講読と受容の面影を残し、古注から新注への移行期にあって、かつ写本の時代から刊本が主となる時流の狭間である時期に、高度の校訂を経て、流布と質との両面を追求して生まれたテキストであることができよう。

近世初までの孟子講読の成果を集約するかくの如き出版の量と質、そしてこれ以後このような趙注孟子の校訂出版は後を断つということからは、出版史上特異な存在であると言えるし、更に、恐らくは現在佚した宋版の姿を伝えるかのような内容からは、文献史上特異な存在であると言えることもできよう。そして、この二つの特異性こそが、古活字版趙注孟子のテキストの性格として強調されるべきことがらに、他ならない。

なお、以上述べたことは、全て、テキストの一面を観察したままであって、校者の所見が正鵠を得ているわけではなく、校者の主張に反立する一面も、当然各テキストの中に多々内包しているのであるから、あくまでも校者の校して得た印象とでも言うべきものである。実際、文化の流れの中で醸成され

る文献の姿は、後人が考える程単純なものではなく、幾つかの実例を以ってして結論を論証できるようなものではあるまい。比較して、そこに浮き彫りにされる事実を認知することのみが、文献に対する誠実なる接し方であると言えよう。計らいを介入せしむるは、強いて慎まなければならない。よって、あくまでも前説(四)は余論に属し、本校記の意味を解くものではない。

三、各本略解

凡 例

一、各本の解説は、便宜上、(一)版種別による略解 (二)現存本略解 (三)存目の三項目に分けた。

一、解説は次の①以下の標目の順で記した。

- ①表紙・外題
- ②封面・見返し
- ③本文に入る前の序等
- ④内題(但し③④は「校記」中に含まれるので、補写の場合等を除き省略)
- ⑤版式
- ⑥尾題(補写の場合を除き「校記」中に含まれるので省略)
- ⑦本文後の附録・跋等
- ⑧刊記

奥附等 ⑨書入・印記・分冊・その他・著録書(著録と略記)・按語(按と略記)、の各項目に分け、本文書入と密接に関わる読書識語奥書は書入の項に、購書跋等はその他の項に配した。著録は解題や図版のあるものみに止めた。按は校者の考察や補記。

②⑤⑦⑧は(一)版種別略解に、①⑨は(二)現存本略解に記す。
一、所蔵者名の頭に*が冠してあるのは、その本の全巻のマイクロフィルムその他の複写が本文庫に蔵することを示す。

(一) 版種別による略解

(1) A種 a 「^増古活字版之研究」第一種

孟子一四卷 漢趙岐注 「慶長」刊(今関正運) 古活字

②無⑤四周双辺有界七行一七字注小字双行。匡郭二一・一(縦・以下同)×一五(横・以下同) 纏。版心粗黒口、双黒魚尾、「孟子卷幾 丁付」(卷一第三丁「孟子題辭」と誤植)。丁数、題辭五丁、卷一・一九丁、卷二・二二丁、卷三・二二丁、卷四・一九丁、卷五・二二丁、卷六・一九丁、卷七・二〇丁(第二〇丁「十二」と誤植)、卷八・一九

丁、卷九・一九丁、卷一〇・一九丁、卷一一・二〇丁、卷一二・二〇丁、卷一三・二三丁、卷一四・二三丁。⑦無⑧

卷一四第二三丁裏第七行に「関東上総住今関正運刊」

(2) A種 b (増補古活字版之研究) 第三種)

孟子一四卷 漢趙岐注 「慶長」刊 古活字

②無⑤A種 a に同じ。卷一第三丁柱題誤植せず。丁数卷七

第二〇丁誤植せず。⑦無⑧無

(3) A種 c (増補古活字版之研究) 第四種)

孟子一四卷 漢趙岐注 慶長一七年前刊 古活字

②無⑤A種 b に同じ。⑦無⑧無

(4) B種 (増補古活字版之研究) 第二種)

孟子一四卷 漢趙岐注 「慶長」刊(下村生蔵) 古活字

②無⑤四周双辺有界七行一七字注小字双行。匡郭二一・七

×一六糰。版心白口、双花口魚尾、「孟子卷幾 丁付」。丁

数A種 b に同じ。⑦無⑧無

(5) C種 (増補古活字版之研究) 第五種)

孟子一四卷 漢趙岐注 「慶長」刊 古活字

②無⑤四周双辺有界八行一七字注小字双行。匡郭二一・二

×一六糰。版心粗黒口、双花口魚尾、「孟子卷幾 丁付」。丁

数、題辭五丁、卷一・一七丁、卷二・二〇丁、卷三・一九

丁、卷四・一七丁、卷五・一八丁、卷六・一七丁、卷七・

一七丁、卷八・一七丁、卷九・一七丁、卷一〇・一六丁、

卷一一・一七丁、卷一二・一八丁、卷一三・一九丁、卷一

四・二〇丁。⑦無⑧無

(6) D種 (増補古活字版之研究) 第五種)

孟子一四卷 漢趙岐注 「慶長」刊 古活字

②無⑤C種に同じ。⑦無⑧無

(7) E種 (慶長勅版)

孟子一四卷 趙注単経本 慶長四年刊 古活字 後陽成帝勅

版

②封面 「孟子慶長己亥刊行」⑤左右双辺有界八行一七

字。匡郭二五×一六・四糰。版心粗黒口、三黒魚尾、「孟

子 丁付」。丁付題辭一〇五、卷一より卷七まで通し六八

丁、卷八より卷一四まで通し六七丁。⑦無⑧無

(二) 現存本略解

(1) A種 a

○慶応義塾図書館蔵 五冊(二〇X/三〇六/五)

① 縹色表紙二六・八×一九・五糎。第一冊のみ題簽あり、「孟子趙岐注 一」と墨書。他冊は剝落。⑨（書入）朱筆のヲコト点、墨筆の返り点・送りがな・縦点・附訓、また欄外に補注（朱点を加う）、以上共に卷第八迄で一筆である。卷第二末に以上と同筆にて奥書を墨書、左の如し。

以累家秘本書写之加朱墨訖為／葉於一之卷申家君御証明而已／給事中清原判

すなわち、清家伝来のテキストから移点したもの。（印記）毎冊首に「本姓佐野／角田来相」△陰刻▽。（分冊）第一冊 題辭／卷二、第二冊 卷三／五、第三冊 卷六／八、第四冊 卷九／一、第五冊 卷二／一四。

○武田科学振興財団杏雨書屋蔵 五冊（恭仁四八・四九）

① 香色花模様空押しつなぎ表紙二八・三×二〇・九糎。題簽

「孟子^{自一至二}」の如く各冊墨書。⑨（書入）朱筆のヲコト点・返

り点（かぎ点）・送りがな・縦点・附訓・声点・校合、墨筆の返り点（かぎ点）・送りがな・縦点・附訓・傍線・行間の補注

・声点・校合、朱墨共に同筆ならむ。朱筆が墨筆を、墨筆が朱筆を訂する所散見。卷四末に「一校畢」（朱筆、他と同筆）

と。江戸前期の筆か。（印記）毎冊首に「曼殊院蔵」△陰刻▽、

「曼殊／函書／之印」△鐘形▽、「足利／学校／之本」、「炳卿珍藏旧／槧古鈔之記」。（分冊）慶大本に同じ。（著録）「恭仁山莊善本書影」昭和一〇年、「新修恭仁山莊善本書影」昭和六〇年。（その他）帙の絹題簽に「慶長古活字本孟子」と墨書。内藤湖南の筆か。

（按）卷九の第三丁裏第二行右「五十在」の三字、慶大本「二十在」（在字墨つき不良）に作る。「五」に作る古鈔本あり、慶大本、杏雨本のいづれかを「修」と断すべきか。杏雨本は書入者の墨筆によって訂字されたものとするべきか。

○財団法人阪本龍門文庫蔵 二冊（七ノ九・四九二） 存卷一至五

① 香色蓮花模様空押しつなぎ表紙二七・七×一九・九糎。題簽に「孟子趙注一（二）」と墨書。⑨（書入）無（印記）毎冊首

「龍門文庫」、「高木家蔵」、「超修」△鼎形墨印▽、毎冊末に「祠伝」△墨印▽。（分冊）第一冊 題辭／卷二、第二冊 卷三／

五。（著録）「龍門文庫善本書目」昭和二七年、「高木文庫古活字版目録」昭和八年

(2) A種 b

○* 静嘉堂文庫蔵 五冊（二〇・二四）

①縹色表紙二五・七×一八糎。題簽「孟子章句 親(義、別序、信) 共五」と墨書。「共五」二字朱筆。⑨(書入) 島田翰手筆、朱にて音注本との校合、表紙見返しに欠筆字標出。本文中の文字を墨筆にて擦る箇所散見す、亦その筆か。(印記) 每冊首「松方/文庫」、「藤原/忠尹」、卷二・七・一三の首「島田翰/読書記」へ陰刻。 (分冊 慶大本に同じ。 (著録) 「増補古活字版之研究」第一八七図。

○東北大学附属図書館蔵 狩野文庫 五冊(阿一五・一三〇)

①香色表紙二七・一×一八・四糎。⑨(書入) 朱筆の句点、ヲコト点。墨筆の返り点、送りがな、縦点、附訓。卷一四の後に遊紙を付して、「孟子篇叙」を墨書へ校記参照。続けて、「御奥書云/孟子篇叙人之本……へ内閣本参照」。改頁して清家本より奥書転写へ墨書。

嘉吉元年八月廿五日可以曾祖父之御説嫡男主水正兼直講宗

一賢/此本御奥書如斯可為証本矣 環^マ軒^マ言^マ翁^マ業^マ一忠

以累代秘本書写之加朱墨訖為後鑑於一之卷申請/家君御

奥書而已 給事中清原 在判

宣賢三

永正九年十一月九日於親王御方全部奉伝授之訖/ □□

へこの二字朱で塗抹

以上本文中書入、篇叙、奥書共に同筆。第一冊首に遊紙を付して墨筆書写あり、如左。

此本係/皇朝至徳三年活刻/距今三百五十七年/蓋清明經所蔵以校/更事見三君跋語/ 節二月湖山 丈/獲之于東都書市中/喜而奔之告余題其/首/延享紀元三月南湖修

へ印記・「屈印/正修」^{陰刻}「身/之」^{陽刻}

すなわち、堀正修(天和三年へ一六八三)宝暦三年へ一七五三)の跋語。

(印記) 「荒井泰治氏ノ寄附金ヲ/以テ購入セル文学博士ノ狩野亨吉氏旧蔵書」、每冊末に「政/芥」へ陰刻。 (分冊) 慶大本に同じ。

○財団法人龍門文庫蔵 五冊(七ノ一四・四九二) 題辭至卷二補写

①香色表紙二七・三×一九・四糎。第一、三冊と第二、

四、五冊は別種の紙を用いるも共に同色。題簽は「趙氏 一三(自六至八)」第一、三冊は同筆。また、「趙氏 自三至五(九之十一

・自十二之十四止)」第二、四、五冊が同筆。各冊右上に「一番/活字」(「一番」は墨筆の上を白でなぞり、「活字」は墨筆)、第

一冊に「活字補写」と墨書、「一番／活字」と同筆。

②無

以下③から⑥までは補写。

③趙氏孟子題辭

孟子題辭者所以題号孟子之書本末指義／

④孟子卷第一

梁惠王章句上

凡七章

梁惠王者魏惠王也魏国名惠諡也王号也時天下有七王皆僭号者也猶春秋之

後漢太常趙

岐

邠卿註

孟子見梁惠王

孟子適梁魏惠王礼請孟子見之

王曰叟不

⑤無辺無界七行一七字注小字双行、字面高さ約二二糎。各葉表

丁右下（書腦）に丁付、「題二／五」「一之二／一之十九」

「二之二／二之廿二」。すなわち、各卷第一丁は丁付なし。本

文・注、通して一筆。

⑥孟子卷第一（二）。

⑨（書入）卷三／一四、朱引、墨筆の返り点・送りがな・縦

点・声点。別筆の朱も散見。第一冊補写部分の書入とは異筆。

第一冊（題辭／卷二）について、朱のヲコト点・返り点・縦

点・附訓、墨の返り点・送りがな・附訓を加え、全て本文と同

筆か。卷一末に奥書（本文と異筆）を墨書、如左。

文龜癸亥中呂申子披覽之処両点凡無子細者哉深／細函底敢

勿出闕外矣 待從三位入道常盛

以累家秘本書写之加朱墨訖為後葉申請 家／君御証明而已

給事中 宣賢判

宣賢二二

卷二尾題後即ち第一冊後表紙見返しに朱書（卷一末奥書と同筆）、

明治十九年歲在丙戌十一月十二日故温故堂藏本当時／根本

通明君藏奔借之以校正者也／

新井政毅識

（印記）每冊首「阿羅／為氏」、「高木文庫」、「龍門文庫」、卷一

四末に「家在／思□／山麓」△陰刻▽。（分冊）慶大本に同

じ。（著録）「龍門文庫善本書目」昭和二七年、「高木文庫古

活字版目錄」昭和八年。

（按）第一冊の補鈔は、新井政毅はたの識語に言う如く、根本通

明の旧蔵本に拠って補ったもののように、「弘文莊古活字版目

録」（昭和四七年）収載の一二六番の『孟子』が即ちそれであ

ろうか。その解説に、「卷第一の末に文龜三年の清原宗賢の、

及び清原宣賢の書写奥書があり……」と言うのが本冊と一致す

る。

ただ、本冊の筆写に関する事実には不明確な点が存在するゆえ、少しく推測を企ててみると、先づ、本文・注は通して一筆であるが、そこに加えられた訓点書入もそれと同筆であるか否かが断定できない。ただし、第三冊に破損部分があり、それに補修補鈔を加えた手は第一冊本文・注の手に同じく、破損していない部分に加えられた書入訓点は、補鈔部分で途切れていない。それ故、この第二冊以降に加えられた書入訓点は補鈔以前のもので、補鈔とは無関係であると考えられる。

次に、本文・注の筆が、二つの奥書、即ち清家跋と新井政毅識語の筆蹟とは別種と判断されることである。この二つの跋文は、まず一手とみて差し支えはない。やや疑念を持たしめるのが「毅」の字。一度書き損じてもう一度その上から書き直していること。自分の名前を果して誤写するものだろうかという疑念である。

以上の諸点に留意するならば、補鈔とそれに伴う書入を、新井政毅がなして、自ら奥書を記したと考えることに逡巡を禁じ得ないのである。つまり、本文・注を新井氏が近辺の人に転写せしめたその令写本に、自ら根本氏の蔵本に拠って訓点書入奥

書を書き加えたと考えるか、または、一人乃至は複数の人に、本文・注、訓点書入、更に奥書を書写せしめ、「阿羅／為氏」の印を以て自らの蔵書となしたと考えるか、の孰れかと推し測りたい。

孰れにしても、新井政毅の筆蹟に関わる問題であり、埼玉県川越市立図書館にその文庫を蔵するので筆蹟を索めたが、一堂に会し得ないゆえにその真偽は定め難い。

新井政毅は、島田翰が多く善本を得た蔵書家で、成篁堂文庫（お茶の水図書館）にもその旧蔵書がある。海保漁村、尾高高雅に学び、明治三五年（一九〇二）に七六歳で歿するという。

「川越市立図書館貴重図書目録」昭和四七年を参照。

○*佐賀県祐徳稲荷神社蔵 一冊（三―七―七九） 存卷三至

五

①栗皮表紙二七×一九・三糎。題簽あるも外題なし。⑨（書入）上欄外のみ墨書し、安積良斎や中村敬字等の説を引用する。（印記）「中川／文庫」、「直郷／之印」、以上巻三首。（その他）表紙見返しに以下の墨書あり。

檢我家古蔵書目録有 泰盛公／蔵本伝 手龍公四書一部積
／年索之不識其所在頃者偶発見斯一冊於古／篋底竟他之數

冊既逸而不可復獲也此／為憾矣而斯一冊公孫丑上下篇及藤
文公上／篇而已而予好読公孫丑上篇是以自慰焉／子々孫々
当永保重之 押印

後表紙見返しに以下の墨書あり、前者と異筆。

此本我 曾祖拾遺勝茂公所藏也伝／在余手恐其久而漫滅故
今書之卷／末以為其証豈啻懷古之玩而已哉／我家之勸学其
庶幾乎／ 延宝戊午仲夏既望

(按) 印記に見える「直郷」は、鹿島藩第六代藩主備前守鍋

島直郷、享保三年八一七七八生、明和七年八一七七〇卒。

延宝六年の手跋は、第四代直条のもの。

(3) A種c

○静嘉堂文庫蔵 五冊(二〇一・二四) 清原宣嘉書入本

①栗皮表紙二七・二×一九種。題簽「孟子卷一 二」等と墨
書、第四冊剝落。②(書入) 本文・注中に、朱筆のヲコト点・
句点・附訓、墨筆の返り点・送りがな・附訓あり。上欄外に朱
筆、墨筆、藍筆の書入、三色同筆。欄外墨筆は、「朱云」「蒙
引」「大全」「直解」等を引く。朱墨筆の識語は以下の通り、

卷一末

安政二年五月廿三日再以折衷加墨了 主水正清原宣嘉

△墨▽

卷二末

自嘉永五年五月廿三日首書新註用黒／写之古義用藍写之講

義以朱書之／至七月十日終功了 藤原嘉 △朱▽

卷三末

安政二年七月十七日加注之点及句読了／主水正清原朝臣宣

嘉 △朱▽

卷六末

安政二年八月廿五日加墨同廿六日講之了／主水正清原宣嘉

△以下墨▽

卷七末

安政二年十月廿二日講談了 主水正宣嘉

卷八末

安政二年四月十二日講談了 清原宣嘉

(印記) 毎冊首に「沢殿／蔵書」、「清原／宣嘉」△陰刻▽。(分

冊) 慶大本に同じ。(著録) 「^{増補}古活字版之研究」第一八八

図。

(按) 清原宣嘉は舟橋庶流沢家の沢宣嘉、天保六年八一八三

五〽明治六年八一八七三〽。

○東北大学附属図書館蔵 狩野文庫 五冊 (阿一五・一三二)

①薄茶色表紙二六・五×一八・三浬。題簽「趙孟子 一」

五」と墨書。⑨(書入)本文・注中に朱の句点、墨の返り点・

送りがな・縦点・附訓、藍筆の書入あり、上欄外に藍墨の書

入。藍筆は朱熹注の引用、墨筆は注疏本写本による校合。毎冊

表紙見返しに「尺蠖廬蔵」と朱書す。(印記)「荒井泰治氏ノ

寄附金ヲ以テ購入セル文学博士ノ狩野亨吉氏旧蔵書」。(分

冊)慶大本に同じ。

○*内閣文庫蔵 七冊 (別四八・七) 釈梵舜校合書入本

①厚手小豆色表紙二七・七×一八・二浬。第二・三冊香色表

紙、第六・七冊香色刷毛目表紙。朱色題簽に「孟子注 一之三」

等と墨書。第二・四冊は題簽なく、同様に、表紙に直接墨書。

外題は全冊一筆。第六・七冊表紙左下に「七冊之内」と墨書

し、これは外題と別筆にして本文書入と同筆か。⑨(書入)朱

筆のヲコト点、墨筆の返り点・送りがな・縦点・附訓・音注・

校合、全巻一筆。奥書左の如し、一筆にして訓点書入と同筆。

卷一末

写本云 文亀癸亥中呂甲子披覽之処両点凡無子細者ノ哉深納

函底敢勿出闕外矣ノ 侍従三位入道常盛

以累家秘本書写之加朱墨訖為後葉申請家ノ君御証明而已

給事中宣賢判

宣賢二二

卷二末

以累家秘本書写之加朱墨訖為後葉於一之卷ノ申家君御証明

而已ノ 給事中清原判

卷三末

以累家秘本書写之加朱墨訖為後葉於一之卷申ノ請家君御証

明而已 給事中清原判

卷四末

以累家秘本書写之加朱墨訖為後葉於一之卷ノ申請家君御証

明而已 少納言清原判

卷五末

以累家秘説加朱墨訖 清給事中宣賢判

宣賢一

卷六末

以家伝加朱墨両点訖 清原宣賢判

重一校相違之所々改付了

宣賢二

卷七末

以累家秘本書写之加朱墨訖為後証於一之卷申家君／御奧書

而已／給事中清原判

宣賢二

卷八末

御本云 以累代秘本書写之加朱墨訖為後鑑於一之申請家君／

御証明而已／少納言宣賢判

宣賢二

卷九末

以累家秘本書写之加朱墨訖為後鑑於一之卷申家君御奧書者

也

卷一〇末

以累代秘本書写之加朱墨訖為後証於一之卷申請家／君御奧

書而已 少納言清原判

宣賢二

卷一一末

以累家秘本書写之加朱墨訖為後証於一卷申家君御／奧書者

也 少納言清原判

卷一二末

以累代秘本書写之加朱墨訖為後証於一／之卷申家君御奧書

者也 給事中清原判

宣賢二

卷一三末

以累葉秘本書写之加朱墨訖為後証於一之卷申請家君／御奧

書而已 給事中清原判

卷一四末

孟子篇叙

△校記参照▽

右侍講席卒書之分不改言辭不飾文章抄之私／又加正義大全

等 師家庭訓頗雖無毫釐之差／蒙昧不敏定可致千里之隔後

葉索隱艾煩不亦／宜乎 少納言清原宣賢判

永正九年十一月九日 親王御方御文字讀以他本奉授之今日

全／部令終其功給者也 宣賢

以摺本書写之加朱墨訖 少納言清原判

永正十四年十月二日於 親王御方講尺申了 宣賢

同十月廿一日申終者也

以他本三ヶ度講說了 宣賢

天文元年八月八日九日於若州小浜栖雲寺竹田舍弟講之了

天文十六年三月廿六日廿八日於越州一乘谷講之

御奥書如斯

孟子篇叙人之本無之仍先達等未加點又讀之余至德三歲講
談之次以僻案加點本經点多以違義理之間又以改正之而已

藏水軒文翁良賢

嘉吉元年八月廿五日以曾祖父之御說授嫡男主水正兼直講
宗賢此本御奥書如斯可為証本矣 環翠軒言翁業忠

論語者五經之鎔鑄六藝之喉衿也孟子之書□而象之諒哉如
天地如日月先年求得古本常忠訓點註字之左但左右之異說
区而似毛萇鄭玄之分周詩輒弁知之這書至德歲良賢真人集
諸家之善說有不安頗為改易之自爾以來為明經儒書故閣
他說尊本一流只若積氏无二亦无三而帰一乘法今雖遂全備
之功嗟吁予毫矣烏焉之失錯魚魯之僻字不可勝計庶幾後之
學者儻改正者不亦宜乎 元龜元祀五月下旬 武衛下朝

臣判

外題 清三位枝賢法名道白筆
考雪庵

予依所望如此則付紙自筆也

新判摺本令所持以家本加朱墨兩点校合之畢 慶長十七

壬歲夷則仲七豊國神宮寺梵舜花押

(印記) 每冊表紙に「昌平坂/学問所」△墨▽、每冊首に「浅
草文庫」、「大学/蔵書」、「日本/政府/図書」每冊末に「昌平
坂/学問所」△墨▽、「文化戊辰」、「日本/政府/図書」。(分
冊) 題辭卷二が第二冊、以下每冊各二卷。

(按) 梵舜は、吉田兼右(清原宣賢の子)の子。天文二二年
△一五五三▽寛永九年△一六三二▽。

○内閣文庫蔵 七冊(別四八・二)

①薄綠色空押つなぎ花模様表紙二七・二×一九・七種。第
一冊表紙右下に「共七本」と墨書。題簽なし。直接表紙に「孟
子注一二」等と外題を墨書。⑨(書入)朱のヲコト点・句点・
合点・附訓、墨の返り点・送りがな・縦点・附訓・音注。(印
記) 每冊首「浅草文庫」、「大学校/図書/之印」、「日本/政府
/図書」、「柯」△墨▽、每冊表紙又本文末尾に「昌平坂/学問
所」△墨▽。(分冊) 前記内閣本に同じ。

(按) 訓点は清家点ならむ。

○京都大学附属図書館蔵 合三冊（一六六キモ） 欠巻六卷

三至五補配A種b本 清原宣条・宣光校合書入本

①表紙二四×一八・三糎。第一冊は薄茶色表紙に「諸経通義 梁惠王^上下^上／公孫丑^下上^上／藤文公^下上^上」と墨書。第二冊は茶の流し模様表紙に「滕文公^下六卷^上／離婁^上七卷^上／万章^上九卷^上／諸経通義地^下八卷^下／万章^上十卷^上／諸経通義地^下八卷^下」と墨書し、その上を楮紙で覆い、「滕文公^上□□□□^下／離婁^上□□□□^下」
／万章^上□□□□^下／諸経通義」^上と墨書する。第三冊は縹色艶出表紙の上に第二冊と同様の楮紙を覆い、「告子^上□□□□^下／尽心^上□□□□^下」
諸経通義人」と墨書する。第二冊と第三冊の覆表紙に記された目録外題は同筆で、他冊はみなそれぞれ別の手である。各冊右下（第二第三冊は覆表紙の右下）に「共三」と墨書するのは、三箇所とも同一手による。⑨（書入）朱筆の返り点・送りがな・縦点・句点があり、第一冊即ち巻第五までが多く、その他は散見する程度である。筆蹟を較べると、巻三から巻五までの朱筆は、それ以外のものと異なるようで、これらの巻が補配される以前に加えられた訓点であると思われる。墨筆の、経文のみに施された訓点、すなわち返り点・送りがな・縦点は、全巻を通して一筆である。更に、欄外に記された補注や校合は、第一冊に多いが、二つの異なる手が混在しているように見える。

補注には「近注」と称して朱熹集注を多く援引する。「青松公シメテ 黄本」などと、家本を以って参考に資せる跡もうかがえる。青松公とは清原国賢、天文一三年（一五四四）慶長一十九年（一六一四）である。欄外に、禁中にて講義を行なった際

の日記が細かに識され、「五月四日始于此」／「序首第一葉」／という箇所から始まり、巻一末「此許／皆宝曆二年九月廿六日」、巻三末「西三／月廿四日／至于此」という具合に、読書の進行が日を追って明記される。巻五中途に「八月廿八日」とある以後はない。読了の識語署名等は、次の如く墨書される。

第一冊表紙見返し

宝曆二年^壬五月四日御読始于此出[?] 論語者去四月廿六日御読了[?] A

宝曆三年正月十九日御稽古始 公孫丑上篇最初 B

巻第二末

宝曆二年十二月廿日御読□于此^{且今年之御稽古今日限之} C

巻第四末

西五月廿三日此篇御読了／少納言清原宣條 D

巻第五末

宣条ノ一

卷第七末

從四位下清原宣光

卷第一二末

宝曆四年八月廿一日此篇畢

(印記) 「天師明ノ經儒」△楕円▽、「宣条ノ之章」△前印を

切り取った後に紙を貼付して押印す▽、以上序首と卷一一首。

「清原ノ氏」、「宣通ノ之印」△陰刻▽、以上卷九と卷一二首。

「京都ノ帝国大学ノ図書之印」、毎冊首。(分冊)題辭から卷第

五まで第一冊、卷第七から卷第一〇まで第二冊、卷第一一から

卷第一四まで第三冊。(その他)卷第一第一四葉、卷第一〇第

一八葉裏、それぞれ補鈔。第一冊後表紙見返しに白紙を貼付し

て左の如く墨書する。

明経慶長活本 八品ノ内△以上朱書▽ノ孟子現合三冊ノ清

原宣条宣光卿 宝曆二年ヨリノ宝曆四年御講義禁中ニ於テ

ノ用ヒラレタル珍書也ノ明治三十七辰 ウ

(按) 本書を、奥書や印記を根拠にして、清原宣条・宣光校

合書入本と著録したのであるが、それは次のような事情が含ま

れていることである。まず、清原宣通・宣条・宣光は、清原氏舟

橋庶流伏原家の嫡流で、その生卒年は次の通りである。

宣通 寛文七年ノ寛保元年 一六六七ノ一七四一

宣条 享保五年ノ寛政三年 一七二〇ノ一七九一 宣通の男

宣光 寛延三年ノ文政一一年 一七五〇ノ一八二八 宣条男

そして、「公卿補任」に据れば、「宝曆一三年叙正五位下、一

四歳、父宣条卿侍読賞讓」「明和四年叙從四位下、一八歳」

「明和八年叙從四位上、廿二歳」という宣光の経歴がみえ、本

書の識語を、この事実の限りで照らし合わせてみると左の如き

了解が得られよう。即ち、一、宝曆二年から宝曆四年に至る講

義は、宣条によってなされたものである。一、識語Fは、宣光

が明和四年Ⅱ一七六七から明和八年Ⅱ一七七一の間に署名した

ものである。以上の二点。さて次に実際の識語の筆蹟を比較検

討してみると、鼻見に据れば、ABCの識語とDEの識語が別

手のように見え、ABCはFと、DEはGと手が同じであるよ

うに思えるのである。要するに、宣条の識語であるべき箇所が

宣光の署名と筆を一にするよう、つまりはABCの識語につ

いては、男宣光が宣条の奥書識語を移録したものであると考え

なければならぬわけである。として、DEGが宣条自筆でよろ

しいということであれば、少なくとも卷三から卷五、卷一二は

宣条の所持本を宣光が補配したとも考えられる。卷三から卷五

までが別版を以て補配されている事実とも関連があらう。

いずれにせよ、代々に亘って奉持受容されたテキストである
と言うべく、批入の解明は、簡単にはいかない。清原明経博士
家世流伝の文献を整理する際の、最も困難かつ重要なテーマ
がここに存する。

因みに、宣条の手沢に係る趙注孟子が、慶応義塾図書館にあ
って、これは寛永頃の、古活字版を覆刻した整版の一本である
が、その巻六末に宝暦三年十月十三日の自筆識語がみえる。こ
れにも満紙書入があつて、宣条近辺の孟子講読を理解する上
で、本古活字版との比較検討もなされねばなるまい。

今は、姑く、古活字版のテキストに焦点をあてるゆえに、の
ちの清原家字に於ける文献研究を俟って、順次これらの検討を
期したい。

(2) B種

○*東洋文庫蔵 七冊(三・A・二〇)

①薄香色刷毛目表紙二六・九×一九・六糎。題簽なし「孟子
一(三・五・七
九・十一・十三)七冊内(七一内)」と直接各冊表紙に墨書、「七
冊内」は薄墨。③題辭欠。⑨(書入)朱引・朱句点・墨の返り

点・送りがな・縦点・附訓あり。経文のみ、注にはなし。(印
記)毎冊首に「木正/辭/章」△陰刻▽、毎冊尾に「雲邨文
庫」。(分冊)前記内閣本に同じ。(その他)巻第一〇の第一七
葉欠、補鈔す。巻第八、第一〇葉上欄に「学校本/僕庚 在上
下」と墨書。足利学校本を参看せる如し。

(按)木村正辞旧蔵。

○宮内庁書陵部蔵 七冊(四〇一・四二)

①薄茶色表紙二七・三×二一・一糎。題簽に「孟子 一(七
七)」と墨書。第一冊のみ「全七冊」と墨書にて加う。⑨(書
入)経文のみに墨書の返り点・送りがな・縦点あり。(印記)
毎冊首に「秘閣図/書之章」、「帝室/図書/之章」。(分冊)
前記内閣本に同じ。(著録)「図書寮典籍解題 漢籍篇」昭和
三五年。

○前田育徳会尊経閣文庫 五冊

①薄香色刷毛目表紙二五・四×一九・一糎。題簽なし。右上
に「仁(義礼智信)共五」と墨書、義から信は黄筆。また右下に
「仁(信)」と墨筆。⑨(書入)朱点が巻一のみに散見。墨筆の
返り点・送りがな・縦点・附訓・声点・校合あり。(印記)毎冊
首に「洒竹文庫」、「平岡/木元/氏」。(分冊)慶大本に同じ。

○大東急記念文庫 五冊(二・三九・五三)

①香色空押出つなぎ花模様表紙二六・二×一九・四糎。題簽に「□□□註 弌(弌参四五)」と墨書。②(書入)朱のヲコト点が全巻に、また巻一首のみに返り点・送りがな・縦点あり、墨筆により全巻に返り点・送りがな・縦点・附訓・校合(一本・唐本・才)、更に付箋や欄外に補注がなされ、補注には朱熹注を引用する。巻四末に朱筆にて、

明経博士清原尚賢撰之

とある。清原尚賢は天和二年(一六八二)生享保一年(一七二六)卒。(印記)無。(分冊)前記慶大本に同じ。(その他)以下の箇所[△]に補写あり。巻五第二〇葉、巻六第二・一二・一八葉、巻七第四・一四葉、巻八第一三葉、巻九第三葉、巻一第一六・一七葉。尚、補写部分[△]は[△]章指[▽]が空欄になったまま補われていない。また、補写葉の朱墨の書き入れは、補写葉以外のものと同筆同様である。(著録)「大東急記念文庫 貴重書解題第一巻」昭和三十一年。

○お茶の水図書館成簀堂文庫蔵 七冊

①薄褐色空押模様入表紙二六・五×二〇糎。題簽に「孟子一之二(以下十三之十四まで)」と第五冊(題簽剝落[▽])を除く各冊に墨

書、第一冊のみその数字の下に「全七」と墨書す。②(書入)

巻一に朱の校合一箇所、巻九に朱の訓点二箇所、巻一〇以降に朱・墨の返り点・送りがな・縦点・校合がある。全て同筆。(印記)「小島氏/図書記」△每冊首・第七冊末[▽]、「尚質/私印」△陰刻・巻一首[▽]、「学/古氏」△巻一首[▽]、「堤藏書」△「文□堂/図書記」△陰刻・以上二顆每冊首[▽]、「□/□堂」△「松戸/鈴木氏」△以上二顆每冊 表紙見返し[▽]、「徳富/猪一郎/之章」△每冊首[▽]、「徳富/猪印」△陰刻・巻一・三・七首[▽]、「蘇峰」△巻一・三首[▽]、「徳富/猪一/郎印」△陰刻・第三冊を除く每冊末[▽]、「蘇峰/学人」△第一・二・四冊末[▽]、「蘇峰文庫」△第三冊を除く每冊首[▽]、「蘇峰/清賞」△陰刻・第五・六七冊末[▽]、「徳富」△陰刻・第六冊首[▽]。(分冊)前記内閣本に同じ。(その他)第七冊巻一四末尾に書誌学者小島宝素、寛政九年(一七九七)〜嘉永元年(一八四八)の墨書がある。

天保十二年小春之朔購授児沂是日/得宋槧本管節度経效産宝/三卷併記志喜質題

(著録)「新修成簀堂文庫善本書目」平成四年。
○太宰府天満宮文化研究所蔵 三冊(二六九) 存巻三至八、巻

①薄香色表紙二五・八×一九・三糎。題簽あるも外題なし。

⑨(書入)朱引、朱句点・合点。一手。墨筆も一手のみで、返り点・送りがな・縦点・附訓。朱、墨が同じ手か否かは不明。

(印記)「秋月香風/樓磯氏印」、「江藤文庫」、「金沢文庫」

△双边墨印▽、「宗/密」△陰刻・円形▽、「大/通」△円形▽、以上每冊首、「大/通」印は每冊末にも。「太宰府/神社社/務所印」、每冊表紙、(分冊)第一冊卷三、五、第二冊卷六、八、第三冊卷二、一、四。(著録)「金沢文庫本図録」昭和一〇年。「増補古活字版之研究」第一八六図。

○大谷大学図書館 五冊(外丙二七) 修

①香色艶出表紙二六・三×一九・三糎。双边△内边書写、外边刻印▽題簽に「孟子趙註」梁惠王上下 一」等と墨書。⑨(書入)

朱の句点・声点・校合、墨筆は薄墨が附訓・濃墨が校合、濃墨は上欄外に。(印記)每冊首「宝玲文庫」、「佞古/書屋」、「口

印/維濟」△陰刻▽。第五冊尾に「月明荘」。(分冊)慶大本に同じ。(著録)「石井積翠軒文庫善本書目」昭和一七年、「弘文荘古活字版目録」昭和四七年、「同待賈書目」四五号昭和四九年、「増補古活字版之研究」第八一九図。

○*内閣文庫蔵 五冊(別四八・三)

①香色表紙二五・三×一八・七糎。直接表紙に「孟子注」一

二(三之五、六之八、九之十一、十二之四)と墨書。第二冊のみ右下に「共五」と墨書し、各冊に目録外題を藍書する。⑨(書入)朱引・朱の校合・句点、墨による返り点・送りがな・縦点・附訓・校合、藍の句点・校合・傍線あり。(印記)「林氏之/蔵書」、「浅草文庫」以上每冊首、「日本/政府/図書」が每冊首並尾、「昌平坂/学問所」△墨印▽が每冊表紙と每冊尾。第一冊首に「江雲

(按)本冊は、石井積翠軒文庫旧蔵に係り、後に神田喜一郎博士に帰し、大谷大学図書館によって整理公開されたもの。東洋文庫蔵本の紙焼写真を以って全巻を比するに、卷三の第一葉、第二葉、第五葉、第七葉の、僅かに四葉のみが異版にして他は全て同版。何らかの事情によって、四葉のみが活字を新たに組み直したものを配したと推測され、B種本の修本と言える。改植の前後の字句に異同はない。

○台湾国立故宫博物院楊氏觀海堂蔵 五冊
未見。「訂増中国訪書志」阿部隆一著昭和五八年を参照。

(5)C種

○*内閣文庫蔵 五冊(別四八・三)

①香色表紙二五・三×一八・七糎。直接表紙に「孟子注」一

二(三之五、六之八、九之十一、十二之四)と墨書。第二冊のみ右下に「共五」と墨書し、各冊に目録外題を藍書する。⑨(書入)朱引・朱の校合・句点、墨による返り点・送りがな・縦点・附訓・校合、藍の句点・校合・傍線あり。(印記)「林氏之/蔵書」、「浅草文庫」以上每冊首、「日本/政府/図書」が每冊首並尾、「昌平坂/学問所」△墨印▽が每冊表紙と每冊尾。第一冊首に「江雲

坂/学問所」△墨印▽が每冊表紙と每冊尾。第一冊首に「江雲

渭樹」△「江」と「渭」陰刻▽、「□／□」△陰刻▽。(分冊)

慶大本に同じ。(その他)第一冊末すなわち巻二末に「鳳池一見」と朱書す。(著録)「^増古活字版之研究」第一八九図。

○大阪府立中之島図書館蔵 五冊(甲和八)

①縹色表紙二六・五×一九糎。題簽に「孟子 二二(以下十二之十四終まで)」と墨書。⑨(書入)朱ヲコト点△巻九まで▽、墨

の返り点・送りがな・附訓。(印記)「大阪図書／館収蔵記」

△每冊首並末▽、「焔掌館／図書」△每冊首▽、「悦／予」△墨

印・每冊題簽並巻一四末▽。(分冊)慶大本に同じ。(著録)

「^{大阪府立}図書館蔵 稀書解題目録」昭和三八年。

○*台湾国立故宮博物院楊氏觀海堂蔵 五冊 修

未見。「^増中国訪書志」阿部隆一著昭和五八年を参照。

(按)「題辭」第一葉のみ内閣文庫蔵本・大阪府立中之島図

書館蔵本と異版にして以下は全て同版。印面から推してこちら

を「修」としておく。誤植等の箇所を墨筆にて後人が巧みに訂

正する。実査しないので明言できないが、写真からは、かく判

断される。

○京都大学人文科学研究所蔵 四冊(松本文庫一三六七経Ⅶ)

修

①縹色空押出つなぎ蔓草模様表紙二六・七×一八・六糎。右

上方に「梁惠王／公孫丑上」などと朱書で目録外題。⑨(書入)

朱の句点・校合・欄外補注、補注は朱注・蒙引△四書蒙引▽等

を引用。墨筆に二手あり、経文のみに加えられた返り点・送り

がな・縦点・附訓の太い筆が古い書入で、黄白二色によって塗

抹されている。また、注文のみに加えられた返り点・送りが

な・縦点・附訓、欄外や行間の補注の細い筆がもう一手で、前

者よりは新しい。補注には、蒙引や仁齋先生古義等を引用す

る。(印記)「有馬氏／溯源堂／図書記」、「高橋蔵書」、「松

本文庫」、「京都大学図書」以上各冊首。(分冊)題辭△巻三ま

で第一冊、以下巻四△七、巻八△一一、巻一二△一四。

(按)内閣文庫本と比するに、「題辭」の第一葉と第三葉の

二箇所につき異版。他は全て同版。但し、第一葉は故宮本と同

版である。

(6)D種

○*宮内庁書陵部蔵 五冊(五五五・一四二)

①栗皮表紙二七・三×二〇・三糎。⑨(書入)題辭のみに朱

の句点・音点・校合、墨の返り点・送りがな・縦点・附訓あ

り。(印記)「帝室／図書／之章」と「読杜／草堂」が毎冊首。(分冊)慶大本に同じ。(その他)第一冊表紙中央に、「此植字判本啓買置虫弘之節出置」と墨書する。(著録)「図書寮典籍解題 漢籍篇」昭和三五年。

○京都大学附属図書館蔵 五冊(清家文庫一三三)

①薄茶色刷毛目表紙三一・七×二一・三種。各冊に「孟子

仁(義礼智信)」と直接墨書、本文書入と同筆。②(書入)朱引、墨の返り点・送りがな・縦点・附訓・校合・欄外の補注と集説。集説には、朱熹注・正義・岩「垣」龍溪・伊藤仁斎等を援引。(印記)毎冊首「京都／大学図／書之印」。(分冊)慶大本に同じ。

(7) E種

○東洋文庫蔵 二冊(三A・a・一九)

①濃藍綠色表紙二九×一九・五種。題簽に「孟子 勅活字刊本 乾(坤)」と墨書。②(書入)卷一一と一二に朱の句点・校合あり。(印記)毎冊首「後陽成帝勅版」、毎冊尾に「雲邨文庫」。(分冊)題辭、卷七まで第一冊、以下第二冊。(その他)第一冊第六六葉八卷七欠葉。第一冊末遊紙に「慶長己亥年／

六月廿九日判行」と墨書す。(著録)「勅板集影」昭和五年、
補古活字版之研究」第八図。

(三) 存目

(1) A種 a

○安田文庫旧蔵

(著録)「補古活字版之研究」第一八五図。

宝玲文庫旧蔵

(著録)「弘文荘古活字版目録」、「弘文荘善本目録」昭和五年、「弘文荘敬愛書図録」昭和五七年。

(2) A種 b

(3) A種 c

○根本通明旧蔵

(著録)「弘文荘古活字版目録」、「弘文荘善本目録」昭和五年。(印記)書影卷一首に「温故堂」八陰刻・塙保己一。

(按)根本通明は号羽嶽、秋田藩士にして後に文科大学教授、明治三九年八一九〇六卒、八五歳。遺書は多く秋田県立図書館に蔵さる。

(4) B種

(5) C種

(6) D種

○伝海保漁村旧蔵

(著録) 「弘文荘古活字版目録」。(印記) 書影の題辞首葉に

「桜山文庫」△鹿島神社司鹿島氏▽

(按) 海保漁村は、諱元備、別名紀之、漁村は号、また伝経

廬とも号す、太田錦城に学び、幕府儒学教授にして考証学の名

家、慶応二年△一八六六▽卒、六九歳、海保元起編「漁村海保

府君年譜」△昭和一三年浜野知三郎発行▽を参照、遺著は多く

東京大学総合図書館に蔵され、未刊の名著が甚だ多い。

(7) E種

○卜部吉田家旧蔵 存卷八至一四

(著録) 「弘文荘古活字版目録」。(印記) 「宝玲文庫」

〔補遺〕

(一) 現存本略解

(1) A種 a

○東京都立中央図書館蔵二冊(特別買上六三八八)存卷四残・卷

十一・卷十二残

①後補茶色表紙二八×二〇糎。第一冊の題簽は江戸期の和刻

本のを流用す。第二冊は更に茶表紙を加え、「孟子公孫丑三

四」と墨書す。⑨(書入)朱句点、朱引、墨の返り点・送りが

な・縦点・附訓。奥書以下の如し、本文書入と同筆。

卷四末

以累家秘本書写之加朱墨訖為後葉於一之卷申請家君御証明

而／己／ 少納言清原 判

宣賢一

卷一一末

以累家秘本書写之加朱墨訖為後証於一之卷申家君御奥書者

也／ 清原 在判

(印記) 各冊首に「中山氏／蔵書／之記」。(分冊) 第一冊が

卷四、第二冊が卷一一と一二。(その他) 卷四は第一〇〜一九

葉、卷一二は第一〜一三葉を存す。

古活字版趙注孟子校記

凡 例

一、本校記は、「宋孝宗朝・蜀」刊の「趙注孟子」（四部叢刊影印）を底本とし、現存する古活字版「趙注孟子」の各版種を代表する七種の伝本の、經文と趙注の文字の校異を示すものである。

一、底本の經文注文の各句を摘録標出（注文は經文より二格を低す）し、一格を空けて校異を記す。經文は一句の異同を記して改行するが、注文は次の經文を標出するまで改行せずにつけて掲げる。従って注文の各句は必ずしも標出する經文に対する注であるとは限らない。

一、掲出の一句について、校異が一本に二つ以上ある時は「」で区切り、各本毎の別は「・」で示し、その句についての終りを「。」で閉じる。

一、字体は、原則として通行の活字体を用いた。異体字・略字・俗字、また木偏と手偏・草冠と竹冠の混用などは原則

として記さない。

一、引拠各本の書名は略号を使用し、「前説」(三)にそれを記した。

一、校異中、「各本」というのは全テキストを指し、「各本無也字・慶大本郷作卿」とあれば、慶大本が「也」字を欠き、かつ「卿」に作ることを意味し、「東洋本同・各本郷作卿」とある場合の各本は東洋本を除く全テキストを意味する。

一、「孟子篇叙」は梵舜本と東北大学附属図書館蔵A種b本に後人の補鈔があり、本来古活字版とは無関係であるが、清家本からの転写であるゆえに、特に異同を示した。

古活字版趙注孟子校記

孟子題辭

趙氏

書陵七行本松方本梵舜本內閣本書陵本作趙氏孟子題辭·各本無趙氏二字。

今鄒鼎是也 慶大本鼎作孫。夙喪其父 內閣本喪字空格。

爭彊 各本彊作強。墮廢 各本墮作隳。惑衆者非一 慶大本惑作感。遂湮微 內閣本微作微。壅底 內閣本壅作壅。

遂以儒道 慶大本遂作逐。不如載之行事 內閣本載作戴。

與高第弟子 內閣本與作與。靡所不載 內閣本載作戴。帝

王公侯 勅版侯作候。卿大夫蹈之則 內閣本卿作鄉。巫聖

之大才者也 慶大本才作戈。孔子答以俎豆 內閣本俎作

俎。五百余載 內閣本載作戴。辯之者既已詳矣 慶大本松

慶方本書陵本辯作辨。閱遠微妙 內閣本微作微。辯惑 大

本松方本書陵本辯作辨。

孟子卷第一

趙氏注

各本篇題如左

孟子卷第一

慶大本

梁惠王章句上

凡七章

梁惠王者魏惠王也魏國名惠諡也王号也時天下有七王皆僭号者也猶春秋之

後漢太常趙

岐

邢卿註

孟子見梁惠王

孟子適梁魏惠王禮請孟子見之

王曰叟不

孟子卷第一

松方本

梁惠王章句上

凡七章

梁惠王者……也時天下……

王号秋之

後漢太常趙

岐

邢卿註

孟子見梁惠王

孟子……禮請……

叟不

孟子卷第一

東洋本

梁惠王章句上

凡七章

梁惠王者……也時天下……

王号秋之

後漢太常趙

岐

邢卿註

孟子見梁惠王

孟子……禮請……

叟不

孟子卷第一

梵舜本

梁惠王章句上

凡七章

梁惠王者……
也時天下……

王号
秋之

後漢太常趙

岐

邢卿註

孟子見梁惠王
禮請……

叟不

孟子卷第一

内閣本

梁惠王章句上

凡七章

梁惠王者……
也時天下……

王号
秋之

後漢太常趙

岐

邢卿註

孟子見梁惠王
禮請……

叟不

孟子卷第一

書陵本

梁惠王章句上

凡七章

梁惠王者……
也時天下……

王号
秋之

後漢太常趙

岐

邢卿註

孟子見梁惠王
禮請……

叟不

孟子卷第一

勅版

梁惠王章句上

孟子見梁惠王王曰叟不遠千里而來亦將

○梁惠王章句上

王号也 内閣本王作玉。孔子時諸侯 慶大本東洋本内閣本

書陵本侯作候。孟子亦以大儒為諸侯 慶大本東洋本内閣本

書陵本侯作候。

○孟子見梁惠王至何必曰利

與利除害也 内閣本與作興。各本也作者乎。疆兵 各本疆

作強。何必以利 内閣本何作可。因為王陳之 各本之下有

也字。有兵車百乘之賦者也 内閣本賦作賦。言家者諸侯

慶大本侯作候。^章指^集穆 各本集作輯。

○孟子見梁惠王至豈能獨樂哉

言文王始經營規度此台 内閣本當作瑩。麀鹿 慶大本麀作

鹿。孟子為王誦此詩 内閣本王作玉。古賢之君 各本作古

之賢君。

子及女皆亡 慶大本子作子。勅版皆作借。民欲与之皆亡皆字同。

時乙卯日也 内閣本時作日。臨土衆而誓之 内閣本之作往。

我与汝俱往 各本汝作女。内閣本往作之。台池禽獸 慶大

本東洋本松方本梵舜本書陵本禽作鳥。

○梁惠王曰至天下之民至焉

足以笑百步止者不 內閣本足作是。直事不百步耳 各本事
作爭。五穀饒穰 內閣本穰作攘。密網也 慶大本網作綱。

密細之網 慶大本網作綱。使林木茂暢 各本林作材。以為
宅冬入保城 慶大本松方本梵舜本書陵本內閣本冬作各。

可以無飢矣 勅版同。各本飢作饑。以下各章本文注文飢字做
之。不可以徭役 各本徭作徭。內閣本役作彼。申重孝悌之

義 慶大本孝作教。頒者班也 慶大本松方本內閣本書陵本
班作班。頭半白斑斑者也 東洋本作頭半白曰頒班者負也。

慶大本松方本梵舜本書陵本作頭半白曰頒班者負也 內閣本
作頭半白曰頒班班者也。故斑白者不負戴也 東洋本作故曰

班白者不負戴於道路也。慶大本松方本梵舜本內閣本書陵本
作故曰班白者不負戴於道路也。何但望民多於鄰國 慶大本

何作阿。以用振救之也 各本振作賑。

○梁惠王曰至民飢而死也

以刃与政有以異乎 內閣本与作異。

孟子欲以次喻王 各本次作政。王復曰政殺人無以異也 各

本曰下有刃字。內閣本殺作教。為率禽獸以食人也 各本人

下有者字。虎狼食禽獸 各本此五字作古者虎狼之中能常食

於禽獸是人所惡今十七字。父母之道也 各本也下有已字。

以教王愛民 內閣本王作玉。

○梁惠王曰至請勿疑

本晋六卿 慶大本內閣本卿作鄉。以致王天下謂文王也 內
閣本致作也。也作致。以捶敵國堅甲利兵 松方本捶作搗。

暴虐已 內閣本同。各本已作以。△章指▽仁与不仁也 各
本不仁下有者字

○孟子見染襄王至誰能禦之

魏之嗣王也 內閣本魏作梁。儼然之威儀也 慶大本威作成。

卒暴問事 內閣本書陵本卒作率。喻人象也 各本象作婦。

夏之五六月 各本無之字。油然而興雲 內閣本興作與。民皆

延頸 內閣本延作廷。△章指▽定天下者 內閣本天作大。

一道自己 各本一道作仁政。

○齊宣王問曰至未之有也

然後道齊也 各本齐下有之事二字。心賤薄之 內閣本同。

各本心作必。欲伝道之者 內閣本之者作者之。殺牲以血

內閣本牲作性。因以祭之 內閣本祭作察。隨釁逆牲 內閣

本牲作性。然百姓皆謂王 內閣本王作玉

編小 各本編作編。

誠有百姓所言者矣 內閣本同。各本無矣字。豈愛惜一牛之

財費哉 內閣本無之字。是乃王為仁之道也 內閣本作是乃

王為仁道也。各本無王字。時未見羊 各本時上有王字。羊

之為牲次於牛 內閣本性作性。以嗟歎 各本歎作嘆。

秋豪之末 各本豪作毫。

挾大山 各本大作太。以下此章倣此。

超北海之類 內閣本北作比。

是折枝之類也 內閣本枝作杖。

天下可軛之掌上言易也 內閣本軛作運。以及兄弟 內閣本

弟作第。可以稱輕重也 內閣本同。各本無也字。可以量長

短也 各本無也字。心比於物尤當為之甚者也 內閣本無當

字。

構怨於諸侯 敕版侯作候。

所大欲者耳 內閣本耳作也。欲令王自道緣以陳之 慶大本

緣作綠。為大甚 內閣本大作太。

敵疆 各本疆作強。

不如疆大 各本疆作強。以一州服八州 內閣本服作股。

蓋亦反其本矣 勅版同。各本蓋作盍。

王道之本 各本作王道之本耳。我情思悞亂 慶大本情思作

悞恩。松方本書陵本情作悞。是由張羅罔以罔民者也 各本

上罔字作網。內閣本下罔字作罔。△章指▽易牲 內閣本性

作性。欲踐其路 各本路作跡。

孟子卷第一 慶大本東洋本松方本梵舜本在第一九葉表第七行。

書陵本在第一七葉表第五行。內閣本第作弟。在第

一七葉表第三行。勅版在第一〇葉表第三行。

孟子卷第二 趙氏注

梁惠王章句下 各本無趙氏注三字。勅版梁惠王章句下六字低二

格。慶大本東洋本松方本梵舜本內閣本書陵本梁惠王章句下

下低五格有凡十六章四字。內閣本第作弟。

○莊暴見孟子至同樂則王矣

王好樂何如 內閣本王作玉。

他日見於王曰 內閣本日作目。

王言我不能好先聖王之樂也 各本無聖字。發賦徭役 各本

徭作徭。以非時取牲也 內閣本性作性。發民驅獸供給役使

書陵本內閣本供作偕。有愍民之心 內閣本愍作憫。△

章指▽王道之階 書陵本內閣本階作偕。

○齊宣王問曰至不亦宜乎

西伯王地 各本王作土。

芻蕘者往焉 慶大本焉作馬。

郊関齊四境之郊皆有関 慶大本二郊字共作效。

○齊宣王問曰至王之不好勇也

文王事混夷 各本混作昆。

詩云混夷 各本混作昆。

故大王事 内閣本同·各本大作太。

安其大平之道也 各本大作太。此一夫之勇、内閣本作此一

匹夫勇。

篤周祜 勅版祜作祜·各本祜作祐。

安天下之民民恐王 内閣本無之字、恐字上有惟字。

○齊宣王見至畜君者好君也

王自多有此樂 内閣本自作有。助其力不足 各本足作給。

軫糧食而食之 内閣本無之字。在位者又賄賂 内閣本位下

有在職二字。由是化之而作慝惡也 内閣本無之字。方猶放

也放棄不用先生之命 松方本書陵本方作於·慶大本東洋本

松方本梵舜本書陵本内閣本生作王。諸侯行霸 慶大本侯作

侯。故為諸侯憂也 慶大本侯作侯。或浮水而下 内閣本浮

作淳。以振貧下不足者也 内閣本下作困。以感喻宣王 内

閣本王作玉。

○齊宣王問曰至於王何有

諸侯不用明堂 慶大本侯作侯。則可無毀也 慶大本也作之。

言往者文王為西伯 内閣本王作玉。文王復行古法也 慶大

本復作履。天下之窮民文王 内閣本無之字、民下有而字。

言居今之世可矣 各本言上有詩人二字。

乃裹糗糧 慶大本裹作裹、糗作餼·松方本梵舜本書陵本内閣本

裹作裹·勅版糗作餼。

干戈戚揚 慶大本松方本内閣本干作于。

思戢用光 松方本書陵本光作先。

有裹囊也 東洋本勅版同·各本裹作裹·注文裹字做此。

以武備之四方啓道路 内閣本無之字、啓下有行字。我有病

病好色 各本病病作疾疾於三字。

当是詩也 各本詩作時。

於其与姜女 各本其作是。

○孟子謂齊宣王至王願左右而言他

○孟子見齊宣王至可以為民父母

王無以知 内閣本王作玉。

吾何以識其不才 慶大本才作戈。

尊卑親疎 各本疎作疏。防比周之譽 慶大本比作此。寔繁

有徒 各本寔作夷。

○齊宣王問曰至未聞弑君也

○孟子謂齊宣王曰至彫琢玉哉

二十兩為鎰 內閣本兩作兩。雕琢治飾玉也 慶大本飾作節

·內閣本玉作王、此章玉字皆做之。雖有万鎰在 內閣本在

作有。教玉人治玉也 內閣本無也字。則玉不得美好 內閣

本玉作玉人。△章指√玉不成圭 各本圭作器。

○齊人伐燕勝之至亦運而已矣

書曰歲三百 各本歲作替。△章指√民心悅 書陵本內閣本

悅作稅。

○齊人伐燕取室可及止也

何以待之 內閣本以作不。

諸侯不義其事 慶大本侯作候。皆尚書逸篇之文也 各本無

之字。夷服之國也 各本服作狄。兩則虹見 書陵本內閣本

兩作兩。我蘇息也 內閣本也作而已。勿徙其寶重之器 慶

大本松方本書陵本內閣本徙作徒。△章指√無貧其富 各本

貪作貧。以小王大 慶大本梵舜本作以大主小·東洋本松方

本書陵本內閣本作以大王小。

○鄒與魯聞至其長矣

以殘賊其下也 內閣本賊作賤。

○滕文公問曰至是可為也

間於齊楚 內閣本間作問。

與之堅守城池 內閣本無之字。則可為矣 內閣本可下有以

字。

○滕文公問曰至強為善而已

滕文公問曰 內閣本滕作滕。

大王居邠 內閣本同·各本大作太。

彊暴 各本彊作強。成功乃天助之也 內閣本無之字。

強為善而已矣 勅版強作彊。

自強為善法 內閣本同·各本無法字。

○滕文公問曰至扞於斯二者

繪帛之貨也 各本無也字。

○魯平公將出至使子不遇哉

貧富不同也 書陵本內閣本貧作貪。

臧倉小子 各本子作人。

孟子卷第二 慶大本東洋本松方本梵舜本在第二二葉裏第七行·

書陵本內閣本在第二〇葉表第五行·勅版在第二二

葉表第四行。

孟子卷第三

趙氏注

本臣作巨。

公孫丑章句上 各本無趙氏注三字·勅版公孫丑章句上六字低二

思以一豪 各本豪作毫

格·慶大本東洋本公孫丑章句上下低五格有凡九章三字·松

目不轉精逃避 慶大本松方本梵舜本書陵本內閣本精作晴·

方本梵舜本書陵本內閣本公孫丑章句上下低六格有凡九章三

東洋本精作晴。若見捶撻於市朝之中矣 內閣本市作布。無

字。

有尊敵諸侯 慶大本侯作俟。但曰舍豈能 各本重舍字。要

○公孫丑章句上

不恐懼而已也 各本也作矣。以為量敵少 內閣本同·各本

○公孫丑問曰至惟此時為然

無敵字。若此畏三軍之衆 內閣本同·各本此下有則字。

豈復知王者之佐乎 內閣本知作如。管仲得遇桓公 內閣本

北宮黝似子夏 內閣本北作比。

遇作過。不帥齊桓公行王道 慶大本書陵本內閣本帥作師。

孝百行之本 內閣本孝下有為字、無之字。曾子謂子襄 內

子為我願之乎 松方本子作予。

閣本襄作衰。不當輕驚懼之也 內閣本無之字·各本無驚

且以文王之德 內閣本且作旦。

字。

謂大甲大戊 各本大二字共作太。

夫志氣之帥 慶大本帥作師。

雖有智慧 勅版同·各本慧作惠。

志帥氣而行之 慶大本書陵本內閣本帥作師。志氣之相動也

王莫之能禦也 勅版同·各本無之字。

各本無也字。言此至大至剛 書陵本下至作金。洽於神明

今齊地土民人已足矣 各本已作以。

各本洽作合。無形而生有形 內閣本有作於。芒芒罷倦之貌

且王者之不作 慶大本且作旦。

各本罷上有然字。以喻人之情邀福 書陵本內閣本之作

△章指▽管晏雖勤 各本晏作嬰。

助。非徒無益於苗 慶大本徒作從。常恐其行義欲急得其福

○公孫丑問曰至有盛於孔子也

書陵本內閣本行作作。若實孟言雄雞自斷其尾之事 書陵

得居齊卿相之位 慶大本內閣本卿作鄉。雖用此臣位 內閣

本內閣本孟下有子字、無之字。与申生政能知 各本生下有

之字。有好殘賊齷醜。書陵本賊作賦。醜作醜。內閣本醜作

醜。

子貢曰學不厭智也。書陵本內閣本貢作真。

仁且智。慶大本且作旦。

可願比但夷不。各本不作否。

非其君不事。各本此句上有曰不同道。言伯夷之行不与孔子伊尹同道也十八字。

事非其君者何傷也。內閣本何作欲。其得行道而已矣。各本

其作冀。量時為宜也。內閣本宜作冥。亦不至於其所好。各

本於作阿。如使當堯舜之処賢之遠矣。各本処作世。賢上有

觀於制度四字。致大平也。各本大作太。△章指▽賢者道偏

各本偏作徧。

○孟子曰以力至此之謂也

服就於人。內閣本就作從。詩大雅文王有聲之篇。內閣本王

作玉。△章指▽文德以懷之。各本懷作來。

○孟子曰仁則榮至此之謂也

譬如若惡濕而居埤下。各本埤作卑。近水泉之地也。內閣本

地下有有字。各本地下有者字。

如惡之莫如。內閣本如作姑。

詩邶國鴟鴞之篇。各本無之字。天未陰雨而。書陵本內閣本

未作末。詩大雅文王之篇

大甲曰。各本大作太

大甲。各本大作太。

○孟子曰尊賢使能至未之有也

俊傑在位。書陵本內閣本俊作後。

俊美才。慶大本俊作俟。但譏禁異言。內閣本禁作楚。閔市

之賦。內閣本作閔之市賦。國凶札則。書陵本內閣本札作

札。謂文王以前。內閣本王作玉。文王治岐閔譏。內閣本

同。各本岐作政。

天下之民皆悅。內閣本皆作背。

周禮載師曰。慶大本載作戴。不耕者出屋粟。各本出作有。

率其子弟功其父母。勅版率作牽。

○孟子曰人皆至不足以事父母

有怵惕惻隱之心。內閣本作有怵惕惕隱之心。

鄉黨朋友。東洋本同。各本鄉作卿。

見小小孺子。內閣本不重小字。情發於中。內閣本情作以。

故怵惕也。內閣本也上有矣字。可引用之。各本之作也。

足以保四海。慶大本足以作以足。

凡有端在於我。內閣本有下有四字。知皆廓而充大。內閣本

知作智。△章指▽內閣本指作捐。

○孟子曰矢人至反求諸己而已矣

仁恩之未至。內閣本未作末。△章指▽治術之忌。書陵本內

閣本忌作忘。勿為矢人也。內閣本為作力、無人字。各本無

人字。

○孟子曰子路至與人為善

以至為帝。內閣本無為字。

是與人為善者也。內閣本人作之。

△章指▽故曰計及下。各本計作許。

○孟子曰伯夷至君子不由也

不立於惡人之朝。內閣本人作之。

望望代之。各本代作去。伯夷不絜諸侯之行。慶大本絜作潔。

袒裼裸裎於我。慶大本內閣本作袒裼裸裎於我。松方本梵舜本書

陵本作袒裼裸裎於我。

云善已而已。書陵本內閣本云作其。孟子乃平之。各本平作

評。△章指▽純聖能終。各本終作然。

孟子卷第三。慶大本東洋本松方本梵舜本在第二二葉表第七行。

書陵本內閣本在第一九葉裏第七行。勅版在第三一

葉表第六行。

孟子卷第四 趙氏注

公孫丑章句下。各本無趙氏注三字。勅版公孫丑章句下六字低二

格。慶大本東洋本松方本梵舜本書陵本內閣本公孫丑章句下

下低五格有凡十四章四字。

○孟子曰天時至戰必勝矣

不以封疆之界。慶大本疆作疆。

域民居民也。內閣本域作城。不以封疆之界。東洋本同。各

本疆作疆。仗道德也。名本仗作伏。

○孟子將朝王至不為管仲者乎

因得見孟子也。慶大本因作固。

明日出弔於東郭氏。書陵本內閣本明作朋。

今日弔或者不可乎。慶大本弔作予。

昔日疾今日愈。慶大本疾作病。

何不弔。慶大本弔作予。

不可以弔。各本弔下有也字。慶大本弔作予。孟子之從昆弟

書陵本內閣本無之字。權辭以對如此。慶大本東洋本松方

本梵舜本辭作禮。書陵本內閣本權下有禮字。心不欲至朝

慶大本心作必。因之其所知。慶大本因作固。具以語景子

慶大本景下有孟字。東洋本松方本梵舜本書陵本內閣本具作

且。書陵本內閣本子下有耳字。今人言謂王無知。各本言作皆。言仁義云爾。書陵本內閣本爾作璽。如我敬王者邪。各本邪作耶。

不俟賀固將朝也。書陵本內閣本俟作侯。

我臣輕於王乎。各本臣作豈。

鄉党莫如齒。慶大本松方本梵舜本內閣本鄉作卿。

言古之大聖。書陵本內閣本之作人。王者師臣。書陵本內閣

本王作玉。桓公能師臣。內閣本臣作巨。今天下人君土地相

類。慶大本土作士。

管仲且猶不可召。慶大本且作且。

故非齊王之召己己是以不往也。各本己已作己。書陵本內閣

本王作玉。

○陳臻問曰至可以貨取乎

故謂之兼金。書陵本內閣本無之字。鎰二十兩。書陵本內閣

本二十作二十四。

○孟子之平陸至寡人之罪也

戎昭果毅。各本戎作以。

凶年飢歲。各本飢作饑。

老羸轉於溝壑。勅版書陵本同。各本老作先。

為王言所与孔距心。書陵本內閣本王作玉。王知本之在己。慶大本王作玉。內閣本王作士。△章指▽人臣以道。書陵本內閣本臣作巨。

○孟子謂蚺鼃曰至有余裕哉

其欲近王似諫正刑罰之。各本似作以。為蚺鼃諫使之諫而去

各本上諫作謀。不知自諫又不去。內閣本又作亦。孟子言

人去。各本人下有臣居官不得守其職諫正君不見納者皆当致

仕而二十字。△章指▽兩行而不息。各本兩作兩。

○孟子為卿於齊至予何言哉

出弔於滕。慶大本弔作予。

孟子嘗為齊卿出弔滕君。慶大本書陵本內閣本卿作鄉。弔作

予。孟子不悅其為人。書陵本內閣本孟作君。或有也。慶大

本東洋本同。各本或作我。

○孟子自齊至天下儉其親

孟子事於齊。各本事作仕。

然後尽於人心。松方本然作□。

一世之厚。各本厚作後。悅者孝子之。書陵本內閣本悅作

稅。王制所禁。書陵本內閣本王作玉。不可稱貸而為悅也

書陵本內閣本悅作稅。

且比化者 慶大本且作旦。

○沈同以其私至何為勸之哉

彼不復孰可 各本復下有問字。

○燕人畔至從為之辭

今竟不能有燕 慶大本今作令。

孰仁且智 慶大本且作旦。

問王曰自視 書陵本內閣本王作玉。

聖人且有過与 慶大本且作旦。

大誥明敕 各本敕作勅。

○孟子致為臣而歸至自此賤丈夫始矣

辭齊卿而歸 慶大本松方本卿作鄉。來就為卿 慶大本卿作

鄉。還使寡人得相見否 各本還作逐。欲使王繼今 書陵本

內閣本王作土。

古之為市也 敕版也作者。

但治其爭訟不征税也 慶大本也作此。賤丈夫貪人 書陵本

內閣本同。各本文作大。左右占望見 各本占作皆。人皆賤

其貪也 慶大本東洋本松方本梵舜本無人字。書陵本內閣本

無也字。遂征商人 慶大本遂作逐。

○孟子去齊至長者絕子乎

客危座而言 慶大本客作容。

客不悅曰 敕版同。書陵本客字不明。各本客作容。

孟子止客曰 各本客作容。

子為長者慮而不及 內閣本而作勿。

△章指▽智能知微 慶大本智作知。

○孟子去齊至士誠小人也

然且至則是 慶大本且作旦。

濡滯猶稽也 慶大本東洋本猶稽作淹久。各本猶稽作淹夕。

士於此事不悅也 書陵本內閣本悅作稅。

予三宿而出昼於予心 書陵本子二字作弔。

改諸則必反予 書陵本子作弔。

夫出昼而王不予追也予然後 書陵本子三字作弔。

有遠志 書陵本內閣本志作惡。

悻悻然見於其面 內閣本然作於。

論曰 各本論作論語。

○孟子去齊至吾何為不予哉

彼前聖賢之出 書陵本內閣本彼下有時字。無之字。松方本

出作豈。△章指▽知命者 各本無者字。

○孟子去齊至非我志也

言我本志欲速。書陵本志作意。

孟子卷第四 慶大本東洋本松方本梵舜本在第一九葉裏第六行。

書陵本內閣本在第一七葉表第七行。勅版在第四〇

葉裏第三行。

齋疏之服 勅版齋作齊。

不學諸侯之禮 慶大本侯作俟。君臣皆行 松方本梵舜本君

作若。

且志曰喪祭從先祖 慶大本且作旦。

我軫有所承受之 慶大本軫作輔。似恐我不能尽 書陵本內

閣本恐作惡。喪上哀 各本上作尚。墨黑也 松方本書陵本

內閣本黑作墨。即喪位而哭百官有司 書陵本內閣本哭作笑

。慶大本有作也。

草尚之風 勅版同。各本尚上有上字。

以身帥之也 書陵本內閣本帥作師。

弔者大悅 慶大本弔作予。

四方諸侯之賔來弔會者 慶大本侯作候、弔作予。

○滕文公問為國至則在君与子矣

詩云昼爾于茅 書陵本昼作書。

言教民昼取 書陵本言作詩。爾將始播百穀矣 慶大本始作

治。故各自載之也 書陵本內閣本載作戴。饒多狼籍棄捐於

地 梵舜本捐作指。至使老小軫尸溝壑 慶大本東洋本松方

本梵舜本尸作乎。書陵本內閣本尸下有乎字。安可以為民之

父母也 書陵本內閣本無之字。古者諸侯卿大夫 慶大本書

孟子卷第五 趙氏注

滕文公章句上 各本無趙氏注三字。勅版滕文公章句上六字低二

格。慶大本東洋本滕文公章句上下低五格有凡五章三字。松

方本梵舜本書陵本內閣本滕文公章句上下低六格有凡五章三

字。

○滕文公章句上

○滕文公為世子至厥疾不瘳

錄諸侯之世 梵舜本書陵本內閣本錄作綠。天下之道一言而

已 各本天上有夫字。德惠乃洽也 各本洽作治。〈章指〉

景行 各本行作出。

○滕定公薨至弔者大悅

滕定公薨 慶大本滕作膝。

然友世子之傳 慶大本書陵本傳作伝。大故謂大喪 各本喪

下有也字。

陵本内閣本卿作鄉。必有土之義也。書陵本内閣本土作上。

曰奚冠。慶大本奚作爰。

大平時。各本大作太。天之先雨公田。書陵本兩作兩。遂以

不為厲陶治陶治。書陵本内閣本治二字共作治。以下此章經文注

次及我私田也。各本遂作逐。而云雨公田。慶大本書陵本内

文陶治之治字皆做此。

閣本兩作兩。射者三耦四矢。慶大本東洋本松方本梵舜本矢

且許子何不為。慶大本且作且。

作失。彝倫攸斂。各本斂作序。雖后稷以來旧為諸侯。慶大

固不可耕且為也。慶大本且作且。

本侯作侯。諸侯各去典籍。慶大本東洋本松方本梵舜本典作

故交易也。書陵本内閣本也作之。尚不可得耕且兼。書陵本

曲。必先正其經界。慶大本東洋本松方本梵舜本必作亦。鈞

尚作当。此反可得耕且為邪。内閣本且作且。

井田平穀祿。内閣本鈞作鈞。比上農夫。慶大本比作此。什

有小民之事。各本民作人。

一而稅之國中。慶大本稅作悅。古者卿以下至於士。東洋本

且一人之身。慶大本且作且。

梵舜本同。各本卿作鄉。

以羸路之困也。各本作以羸困之路也。

死徙無出鄉。勅版同。各本徙作徒。

禽獸偏人。慶大本作禽偏獸人。

徙謂爰土易居。各本徙作徒。爰作受。

注諸海。内閣本注作汪。

鄉田同井出入相友。慶大本松方本梵舜本鄉作卿。

禹勤事於外。内閣本勤作鞞。八年之中三過其家門而不得入

同鄉之田共井之家各相營勞也。慶大本松方本書陵本内閣本

書陵本内閣本無之字。慶大本東洋本松方本梵舜本無得

鄉作卿。内閣本營作營。周礼太宰。各本大作大。〈章指〉

字。

采人之善。各本善作養。鈞井田。内閣本鈞作鈞。

后稷教民稼穡。書陵本内閣本教民作民教。

○有為神農之言者惡能治國家

司徒主人教以人事。各本主作得。

其徒學其業者也。内閣本業作菜。滕君未達至道也。内閣本

放勳日勞之來之。各本日作日。

未作末。相曰然。内閣本然作終。

遭水災恐其小民。書陵本災作災。

北方之學者未聞或之先也 各本聞作能。

任担也 各本任作仕。聖人之絜白 慶大本東洋本松方本梵

舜本絜作潔。

南蠻馱舌 慶大本舌作吉。

許子託於大古 內閣本同。各本大作太。

周公方且膺之 慶大本且作旦。

麻縷絲絮輕重同 梵舜本書陵本內閣本絜作紫。

不相偽誕 各本誕作詐。多寡謂斗石 書陵本內閣本斗作

計。故曰無二賈者也 書陵本內閣本無上有市字、無也字。

和氏之璧 慶大本和作知。人豈肯作其細者哉 書陵本內閣

本豈肯作肯豈。特許子教人偽者耳 各本特作時。△章指▽

不理万情 各本万作物。

○墨者夷之至命之矣

徐辟孟子弟子也 慶大本徐作徒。欲以辯道也 書陵本內閣

本辯作辨。

道不見我且直之 慶大本且作旦。

先從己親屬始耳 書陵本內閣本先從作從先。

徐子以告孟子 各本重孟子二字。

且天之生物也 慶大本且作旦。

上世未制禮之時 內閣本未作末。嘬攢共食之也 慶大本嘬

攢作最相。各本攢作相。泚汗出泚泚然也 東洋本梵舜本同

·各本汗作汙。故汗泚泚然出於額之汗字亦倣此。為問者有

頃之間也 書陵本內閣本下問作問。

孟子卷第五 慶大本東洋本松方本梵舜本在第二一葉表第七行。

書陵本內閣本在第一八葉裏第七行。勅版在第五○

葉表第一行。

孟子卷第六 趙氏注

滕文公章句下 各本無趙氏注三字。勅版滕文公章句下六字低二

格。慶大本東洋本松方本梵舜本書陵本內閣本滕文公章句下

下低五格有凡一十章四字。

○陳代曰至直人者也

請孟子 各本請下有見字。

取非其招不往也 勅版不作而。

無棺槨 各本槨作椁。要利也 內閣本作要其利也。趙簡子

晉卿也 慶大本卿作鄉。貫臧必矢 內閣本臧作機。我不習

与小人 梵舜本習作者。

御者且差 慶大本且作旦。

尚知羞恥此射者 各本羞恥作恥羞 此作比。從彼驕慢諸侯而見之 慶大本侯作候。內閣本之下有乎字。

且子過矣 慶大本且作旦。

△章指▽是以諸侯 慶大本東洋本松方本書陵本侯作候。

○景春曰至此之謂大丈夫

使疆陵弱 各本疆作強。就爾成德 內閣本爾作璽。△章指

▽阿意用謀 各本用作相。

○周霄問曰至鑽穴隙之類也

周霄魏人 各本人下有也字。三月無君則弔 慶大本弔作

予。乃弔於三月無君 慶大本書陵本弔作予。諸侯耕助者

慶大本東洋本松方本侯作候。

案盛不絜 敕版繁作潔。

夫人親織蠶繅之事 各本織作執。所以覆器者也 書陵本覆

作復。不亦可弔乎 慶大本書陵本弔作予。

出疆必載質何也 松方本書陵本內閣本疆作疆。慶大本載作戴。

出疆何為復載質 慶大本松方本梵舜本書陵本疆作疆。

豈為出疆 慶大本梵舜本內閣本疆作疆。

不知其急若此若此 各本不重若此二字。須禮而行 內閣本

須作順。

○彭更問曰至食功也

孟子徒衆多 內閣本徒作從。

子如通之則 慶大本作子如之通則。

輪人與人作車者 內閣本與作与。周礼攻木之工七 內閣本

七作也。梓匠輪輿 內閣本輿作與。

其志亦將以求食与 勅版同。各本無亦字。

△章指▽諸侯不為素餐 慶大本侯作侯。

○万章問曰至大何畏焉

湯居亳 松方本書陵本內閣本亳作毫。

放縱無道 內閣本縱作□。

湯使亳衆往 書陵本內閣本亳作毫。

湯所以伐殺葛伯 松方本書陵本伐作我。

北夷怨曰奚為後 各本夷作狄。

大誓曰 東洋本梵舜本大作太。

大誓古尚書 各本大作太。以下此章大誓大字皆倣此。侵于

之疆侵紂之疆界 東洋本上疆作疆。慶大本松方本書陵本內

閣本二疆字共作疆。優前代 內閣本前作萌。△章指▽不王

未由也已 書陵本未作末。內閣本王作土。未作末。

○孟子謂戴不勝曰至独如宋王何

楚衆人咻之者嚙也 各本嚙作謹。

○公孫丑問曰可知已矣

孟子言魏文侯 慶大本侯作俟。有好善之心 各本善作義。

二人距之大甚 各本大作太。豚非大牲 內閣本牲作性。子

路剛直故曰 慶大本直故作故直。由是觀君子子路之言 各

本君作曾。養正氣不以入邪也 內閣本邪作耶。△章指▽赧

然不接傷若夏畦也 各本無此九字。

○戴盈之曰至何時來年

其鄰之雞 勅版雞作鷄。

謂盈之之言若此類者也 內閣本不重之字、類下有之字。

△章指▽待旦而 東洋本內閣本同·各本且作且。

○公都子曰至聖人之徒也

論議者也 慶大本議作譏。好辯言子好與楊墨之徒辯爭 內

閣本二辯字作辨、言下有孟字。故辯之也 內閣本辯作辨。

為窟穴而處之 內閣本處作所。流行於地而去也 各本也作

之。故作邪偽之說 各本邪作詐。

討其君驅飛廉 慶大本君作居。

飛廉紂諛臣 慶大本廉作庶。

武王烈佑啓我後人 慶大本佑作佐。

佑開後人 慶大本佑作佐。世衰道微周衰之時也 內閣本微

作微、下衰作衰。

揚朱墨翟之言 各本揚作楊·以下經文揚朱揚字微此。

聖人之道不與 各本人作王。以干諸侯 慶大本侯作俟。無

尊異君父之義 內閣本異作卑、無之字·各本異作卑。而以

橫議於世也 內閣本以下有縱字。夷狄之人驅害人之猛獸也

內閣本無之二字。

莫我敢承 勅版內閣本同·各本無我字。

此詩已見上篇說 內閣本同·各本詩作說。△章指▽章指言

慶大本言作云。周公仰思 各本仰思作抑志。不辯也 內

閣本辯作辨。

○匡章曰至而後充其操者也

是以絕糧 內閣本同·各本糧作糧。仲子目不能挾也 各本

目作自。比於齊國之士 書陵本土作土。抑亦得盜跖之徒

書陵本內閣本徒作從。目織屨妻 各本目作自。以易食宅耳

內閣本食作舍。兄名戴為齊卿 慶大本書陵本內閣本卿作

鄉。

生職 內閣本職作鵝。

受人之職 松方本職作鵝。

孟子卷第六 慶大本東洋本松方本梵舜本在第一九葉裏第六行。

書陵本內閣本在第一七葉表第七行。勅版在第五九

葉裏第三行。

○孟子曰規矩至此之謂也

厲王流于彘 內閣本于作干。詩大雅蕩之篇他 慶大本東洋

本松方本梵舜本書陵本詩作謂。梵舜本內閣本大作太。在夏

后之世耳 內閣本同。各本后作治。

孟子卷第七

趙氏注

離婁章向上 各本無趙氏注三字。勅版離婁章句上五字低二格。

慶大本東洋本松方本梵舜本書陵本內閣本離婁章句上下低六

格有凡二十八章五字。

疆酒 各本疆作強。△章指▽慶大本章指作指章。莫若為人

各本人作仁。

○孟子曰愛人至自求多福

皆反求諸己 慶大本反作友。

已仁獨未至邪 各本獨作猶。

詩云永言配 勅版書陵本內閣本同。各本永作求。

○孟子曰人有恒言至家之本在身

卿大夫之家也 慶大本卿作鄉。不得良卿大夫 內閣本卿作

鄉。

○孟子曰為政至溢乎四海

謂賢卿大夫 松方本書陵本內閣本卿作鄉。所則效 內閣本

效作郊。

一國慕之 內閣本慕作暴。

賢卿大夫一國思 慶大本松方本書陵本卿作鄉。沛然大治

○孟子曰離婁至吾君不能謂之賊

魯班 內閣本同。各本班作班。陽律太族 內閣本族作簇。

先王之道 內閣本無之字。乃可為後法也 內閣本後下有世

字。統以四者 內閣本以下有其字。尽心欲行恩 慶大本恩

作思。罹於密網也 各本網作罔。

詩曰天之方蹙 各本曰作云。

言吾君不肖 內閣本肖作背。△章指▽國由先王禮義 各本

國作因。

梵舜本書陵本內閣本治作治。

○孟子曰天下至逝不以濯

故百年乃治 各本治作治。詩大雅文王之篇 各本無之字。

執裸暢之礼 各本暢作鬯。持熱而不以水 內閣本無而字。

喻為國 內閣本喻下有其字。違仁而無敵也 內閣本敵下有

於天下三字、無也字。△章指▽衰逢 內閣本衰作襄、逢作

蓬。違仁也 內閣本無也字。

○孟子曰不仁者至此之謂也

清濯所用 內閣本濯作濁。

必自毀然後人毀之國必自伐然後人伐之 各本二然字共作而。

自為可誅伐 內閣本為作烏。

大甲曰 各本大作太。

說同 各本同下有也字。△章指▽戰戰恐慄也 各本慄作

栗。

○孟子曰桀紂至此之謂也

而欲卒求之 內閣本卒作率。桀紂是也 內閣本同·各本桀

上有土字、但松方本書陵本土作土。

○孟子曰自暴者至而不由哀哉

○孟子曰道在邇而求諸遠

○孟子曰居下位至未有能動者也

△章指▽本在於身 松方本書陵本在作至。為貴也 各本貴

作責。

○孟子曰伯夷至必為政於天下矣

文王起興王道 內閣本興作與。

大公辟紂 各本大作太。

猶天下之父也 內閣本天作大。天下之子耳子當隨父 內閣

本無之字、耳下有有字·各本耳作有。

諸侯有行文王 內閣本侯作侯。

七年之間 內閣本無之字·書陵本間作難。故七年文王時難

內閣本故下有云字·書陵本難作間。

○孟子曰求也至任土地者次之

況於爭地 各本於下有爭城二字。殺人滿之乎 內閣本同·

各本之作野。不足以容之 內閣本容作客。連諸侯合從者也

內閣本無也字。辟草任地 內閣本任上有萊字、地上有土

字。△章指▽同聞鳴鼓 各本同作固。

○孟子曰存乎人者至人焉廋哉

△章指▽目可神候 各本可作為。人之道 內閣本人作之。

○孟子曰恭者至笑貌為哉

和声諂笑之貌 内閣本声下有音字、無之字。△章指▽章指言 各本言上有其字。

○淳于髡至援天下乎

淳于髡齊人也 書陵本人作今。何不援之 内閣本之下有乎字。

○公孫丑曰至不祥莫大焉

○孟子曰事執至曾子者可也

失仁義則 各本失作夫、仁作不。先本後末 慶大本内閣本末作未。

將徹必 書陵本内閣本同·各本將作時。

○孟子曰人不足至而國定矣

政不足間也 各本足下有与字。

不足復非說 名本說作說。

○孟子曰有不虞之譽

有求金之毀 内閣本有作者。

若尾生 内閣本尾作瓦。不度水之卒 内閣本卒作率。

○孟子曰人之易其言也

○孟子曰人之患在好為人師

未有可師 慶大本末作末、有可作可有·各本有可作可有。

△章指▽師哉師哉 慶大本下師作帥。

○樂正子至克有罪

△章指▽尊重道 各本尊下有師字。

○孟子謂樂正子曰

今隨從貴人 各本貴人作人貴。

○孟子曰不孝至以為猶告也

不為祿仕二不孝也 松方本梵舜本二作一。

○孟子曰仁之實至手之舞之

從兄使不失其節 内閣本從作徒。

手之舞之 慶大本舞作舜、注舞字做之。

豈從自覺 各本從作能。

○孟子曰天下至此之謂大孝

底子瞽瞍底子而天下化瞽瞍底子 慶大本上底作底·東洋本中底

作底·梵舜本下底作底·各本三底皆作底。

底致也 慶大本底作底·各本底作底。

孟子卷第七 慶大本東洋本松方本梵舜本在第二〇葉表第七行·

書陵本内閣本在第一七葉裏第七行·勅版在第六九

葉裏第五行。

孟子卷第八

趙氏注

離婁章句下 各本無趙氏注三字·勅版離婁章句下五字低二格·

慶大本離婁章句下下底五格有凡三十三章五字·東洋本松方本梵舜本書陵本內閣本離婁章句下下底六格有凡三十三章五字。

○孟子曰舜生至其揆一也

卒終 書陵本內閣本卒作率。西夷之人也 慶大大東洋本松方本梵舜本無西字·書陵本內閣本無之字。書曰天子 各本大作太。上祭于畢 慶大本于作干。千有余里以外也 各本里下有千里二字。謂王也 書陵本內閣本作蓋謂王。節玉節也 書陵本內閣本玉作王。

○子產聽鄭國之政至亦不足矣

徒杜成 書陵本內閣本徒作從。

惠民之用 各本用作心。可以成步渡之功 各本步作涉。不足以足之也 內閣本足之作之足。

○孟子告齊宣王曰至何服之有

臣視君如寇讎 慶大本臣作君。

問禮旧臣為旧君 內閣本上旧下有君字。

導之出疆 東洋本松方本書陵本疆作疆。

然後取其田里此之謂三有禮 慶大本東洋本松方本梵舜本無里字

·書陵本無田字·內閣本無之字。

取其田萊及里居也 內閣本田下有里田二字、無也字。則為之服矣 內閣本無矣字。△章指▽諷論 各本諷作風。勸以仁也 書陵本內閣本以作而。

○孟子曰無罪而殺士

士可以徙 書陵本內閣本徙作徒。

仁鳥曾逝 各本曾作增。

○孟子曰君仁莫不仁

○孟子曰非礼之礼

○孟子曰中也至不能以寸

賢不肖相覺 書陵本內閣本肖作背。

○孟子曰人有不為也

○孟子曰言人之不善

△章指▽不臧 各本臧作藏。

○孟子曰仲尼不為已甚者

斯可矣不欲其已甚 書陵本內閣本矣作故。△章指▽論曰 各本論作語。

○孟子曰大人者言不必信

○孟子曰大人者不失

○孟子曰養生者不足以当大事

○孟子曰君子至欲其自得之也

君子學問之法 各本學問作問學。如性自有之也 書陵本內閣本之下有然字。在所逢遇 書陵本內閣本遇作過。君子欲

自得之也 各本自作自。△章指▽不惑 書陵本惑作感。君子好之 書陵本內閣本好作妨。

○孟子曰博學而詳說之

詳說之 書陵本內閣本詳作祥。

○孟子曰以善服人者

治岐是也 書陵本內閣本是也作邑是。

○孟子曰言無實不祥

○徐子曰至君子恥之

潦水卒集 書陵本內閣本卒作率。無本之故也 書陵本內閣本作以無其本故也。

○孟子曰人之至非行仁義也

幾希無幾也 慶大本希作布。倫序 書陵本內閣本序作叙。

人事之序 書陵本內閣本序作叙。非彊力 各本彊作強。

○孟子曰禹惡至坐以待旦

儀狄作酒 慶大本狄作秋。絕旨酒 慶大本東洋本松方本書陵本內閣本旨作育。書曰禹拜讜言 各本讜作昌。雍容 書陵本內閣本容作客。

坐以待旦 書陵本內閣本旦作且。

坐而待旦 各本而作以。

○孟子曰王者至竊取之矣

大平道 各本大作太。

齊桓晉文 書陵本內閣本桓作栢。

與於記惡之戒因以 書陵本因作困。故拳之 慶大本拳作与。

△章指▽大平時 各本大作太。春秋乃與 書陵本與作与。

○孟子曰君子之沢五世而斬

我未得為 慶大本書陵本未作末。淑善也 內閣本無也字。

善之於賢人耳 內閣本無之字。恨不得學於大聖也 內閣本恨上有其字、恨下有其字。

○孟子曰可以取

○逢蒙學射至發乘矢而後反

其僕曰庾公之斯也 慶大本東洋本松方本梵舜本僕作庾、庾作僕。

吾必生矣 書陵本必作以。

其僕曰庾公之斯衛 慶大本東洋本松方本梵舜本僕作庾、庾作僕。

用心不邪僻 各本僻作辟。乘四也詩云四矣 東洋本松方本

梵舜本作乘四詩云也四矣。△章指▽書陵本內閣本重複指字。

全養凶 書陵本全作金、無養字。內閣本無養字。夷羿以殘

各本殘作賤。

○孟子曰西子至以祀上帝

不絜 勅版絜作潔。

○孟子曰天下至可坐而致也

天下之言性 書陵本性作惟。

失其利 書陵本利作惟。內閣本利作性。欲用智而妄 書陵

本內閣本妄作妾。不順物 各本物下有之性而改道以養之八

字。空虛 書陵本內閣本同。各本作虛空。△章指▽乖性命

之旨也 書陵本性作惟、旨作肯。內閣本旨作肯。

○公行子至不亦異乎

就右師之位 書陵本內閣本師作帥。

齊卿大夫 慶大本書陵本內閣本卿作鄉。皆諂於貴人也 慶

大本皆作言。

不歷位而相与言 書陵本內閣本無而字。

惡子敖 書陵本內閣本惡作要。

○孟子曰君子至君子不患矣

人必反之己也 書陵本內閣本作人亦必反報於己也。暴虐之

道 慶大本東洋本松方本梵舜本虐作虛。君子反自思省 書

陵本內閣本思作恩。無知者与禽獸 各本無上有為字。

未免為鄉人也 東洋本同。各本鄉作卿。

不致意 各本意作患。一朝橫來 梵舜本橫作披。

○禹稷当平世至雖閉戶可也

身為公卿 慶大本卿作鄉。

由已溺之 各本之下有也字。

勞佚異矣 書陵本內閣本佚作供。

鄉鄰有鬪 東洋本敕版同。各本鄉作卿。

鄉鄰同鄉也 各本無也字。慶大本二鄉字作卿。梵舜本下鄉

作卿。鄉人非其事 慶大本松方本梵舜本鄉作卿。書陵本內

閣本鄉人作卿鄰。△章指▽時行則行 各本無下行字。

○公都子曰至是則章子已矣

鬪很 各本很作狼。

五不孝中也 梵舜本無中字。

不相遇也 書陵本內閣本遇作過。

遇得也 內閣本遇作過。父逐之 書陵本內閣本逐作遂。

○曾子居武城至易地則皆然

曾子居武城 書陵本城作域。牆屋之壤 各本壤作壞。武城人為曾子 慶大本城作域。吾沈猶氏 書陵本內閣本氏作民。師賔 書陵本內閣本作賔師。又為臣委質 書陵本內閣本為作無。易処同然 書陵本內閣本処作地。△章指▽謂得其同各本同作宜。

○儲子曰至与人同耳

衆人之容乎 書陵本內閣本容作客。△章指▽儲子之言 各本無之字。

○齊人有一妻至幾希矣

卒之東郭墦間 梵舜本書陵本內閣本卒作率。良人未之知也 書陵部本人作大。

喜悅之貌 各本貌下有也字。△章指▽与正道乖 慶大本乖作卒。

孟子卷第八 慶大本東洋本梵舜本在第一九葉裏第七行。松方本

在第一九葉裏第六行。書陵本內閣本在第一七葉表

第八行。敕版在第九葉裏第八行。

孟子卷第九

趙氏注

万章章句上 各本無趙氏注三字。勅版万章章句上五字低二格。

慶大本万章章句上下底五格有凡九章三字。東洋本松方本章章句上下底六格有凡九章三字。梵舜本書陵本內閣本万章章句上下底七格有凡九章三字。

○万章章句上

○万章問曰至予於大舜見之矣

旻天秋也 書陵本內閣本也作天。胥須也 書陵本須作順。須天下悉治 慶大本東洋本松方本治作洽。書陵本須作順、治作洽。匍匐於父母前也 內閣本無也字。三十在位在位 慶大本東洋本松方本梵舜本三作二、不重在位二字。書陵本內閣本不重在位二字。△章指▽夫孝者 各本無者字。百行之本 內閣本無之字。

○万章問曰至喜之奚偽焉

齊風南山之篇 各本齊下有国字。礼娶須五札 書陵本內閣本娶作嬰。父母亢答 各本亢作先。捐去其階 書陵本內閣本捐作指。取其善者 慶大本東洋本松方本梵舜本其作於。棲牀也 書陵本內閣本牀作床。以下此章牀字皆倣之。象見舜生在牀 各本無生字。不知舜不知象之將殺之与 各本下之作已。書陵本內閣本舜作象、象作舜、与作與。搖尾之貌

慶大本松方本書陵本搖作捶・梵舜本內閣本搖作搗。

難罔以非其道 梵舜本內閣本罔作罔。

○万章問曰至此之謂也

身為天子 書陵本內閣本身下有既字。豈可使為匹夫也 書

陵本內閣本無也字。

敢問或曰放者 書陵本內閣本或作成。

△章指▽友于之性 書陵本內閣本性作惟。

○咸丘蒙問曰至不得而子也

堯帥諸侯北面 慶大本書陵本內閣本帥作師・書陵本內閣本侯作

俟。

君不敢臣 內閣本敢作□。故問齊野人之言 各本問作聞。

舜其容 書陵本內閣本容作客。

放勛 書陵本內閣本勛作勳・注文勛字做之。

瞽瞍之非臣如何 書陵本內閣本何作可。

志在憂旱災 書陵本內閣本災作炎。

孝思惟則此之謂也 勅版惟作維。

詩大雅下武之篇 慶大本下作丁。

齋慄 書陵本作齊粟・內閣本作齊粟・松方本作齋粟・各本作齋

栗・注文齋慄二字並戰慄之慄字皆做之。

○万章曰堯以至此之謂也

天之曆數 各本曆作歷。欲知之之意 內閣本下之字空格。

天子能薦人於天 書陵本內閣本薦作薦。

不能使諸侯与之大夫 書陵本內閣本侯作俟。

不之堯之子而之舜 慶大本中之字作子。

不謳歌堯之子 書陵本內閣本之作不。

大誓曰 各本大作太。

○万章問曰人有言至其義一也

大甲能改過 各本大作太。

大丁 各本大作太。

大甲 各本大作太。

復歸於亳 書陵本亳作毫。

大丁湯之天子 各本大作太。皆大丁之弟也 各本大作太。

大甲大丁子也 書陵本內閣本同・各本大作太。遷徙也居仁

徙義 慶大本內閣本二徙字共作徙・書陵本下徙作徙。故復

得歸之於亳 慶大本松方本亳作毫。

○万章問曰人有言至朕載自毫

負鼎俎 書陵本內閣本俎作俎。干湯有之否 慶大本書陵本

干作于。欲就湯聘以行其道 書陵本內閣本聘作瞽。

天之生此民也 書陵本內閣本天下有下字。

天欲使堯知之人 書陵本內閣本堯作先。未知之民 各本無之字。救民之厄也 書陵本內閣本厄作尼。

婦潔其身 慶大本東洋本松方本潔作絜。

勉身遠也或近者仕者 書陵本內閣本無也字。各本無上者

字。婦於身絜 書陵本內閣本同。各本絜作潔。

要湯 慶大本湯作陽。

干湯致湯 各本干作于。

朕載自毫 書陵本載作戴。毫作毫。內閣本載作戴。

毫殷都也 慶大本松方本毫作毫。謀之於毫 慶大本松方本

毫作毫。

○万章問曰或謂至何以為孔子

進以礼退應義 各本應作以。

為陳侯周臣 書陵本內閣本侯作侯。

司城貞子宋卿也 慶大本松方本書陵本內閣本卿作鄉。不暇

挾大賢臣 書陵本內閣本大人。主貞子 書陵本內閣本貞

作貞。於衛齊無厄難 書陵本內閣本衛下有而字。△章指▽

君子大居正 各本大作夫。孟子辯之 書陵本內閣本孟作

孔。辯作辨。

○万章問曰或日至賢者為之乎

屈產之乘 書陵本內閣本乘作垂。

而相之可謂不智乎 書陵本內閣本智作知。

食牛干人君 慶大本干作于。卒相秦 書陵本內閣本卒作

率。

孟子卷第九 慶大本東洋本松方本梵舜本在第一九葉裏第七行下

。書陵本內閣本在第一七葉裏第五行。勅版在第二

○葉表第一行。

孟子卷第十 趙氏注

万章章句下 各本無趙氏注三字。勅版万章章句下五字低二格。

慶大本東洋本万章章句下低六格有凡九章三字。松方本梵舜

本万章章句下低七格有凡九章三字。書陵本內閣本万章章句

下低八格有凡九章三字。

○孟子曰伯夷至非爾力

思与鄉人处 慶大本松方本梵舜本鄉作卿。

更思廉絜 書陵本內閣本同。各本絜作潔。

予天民之先覺者 各本者下有也字。

阨窮而不閔 各本閔作憫。

与郷人処由由 東洋本勅版同・各本郷作卿。

祖楊裸程 東洋本梵舜本同・勅版程作程・慶大本松方本祖作

祖・程作程・書陵本祖作祖・程作程・内閣本楊作楊・程作

程。

聖之任者也 書陵本内閣本任作仕。

玉振之也者終条理 書陵本内閣本玉作王。

玉振之 書陵本内閣本玉作王。振揚玉音 書陵本内閣本玉

作王。玉終其声 書陵本内閣本玉作王。含五德 各本作合

三德。

聖之事也 書陵本内閣本也作之。

△章指√由可諭 各本由作猶。

○北宮錡問曰至以是為差

北宮錡衛人 慶大本北作比。問周家班列 慶大本東洋本班

作班。諸侯欲恣行 慶大本侯作侯。聞其大綱 書陵本内閣

本綱作綱。

侯一位子男同 各本位下有伯一位三字。

附於諸侯曰附庸 書陵本内閣本侯作侯。

土地之等差也 慶大本東洋本松方本梵舜本土作土。天子封

畿 慶大本書陵本内閣本畿作幾。天子之卿大夫之士 書陵

本卿作郷。公侯之國為大國卿祿 慶大本侯作侯、卿作郷・

松方本内閣本卿作郷。十分之一也上士之祿 各本也下有

夫祿居於卿祿四分之一也十二字。庶人在官 書陵本内閣本

人在作在人。未命為士者也 松方本内閣本未作未。居卿祿

三分之一也 慶大本書陵本内閣本卿作郷。

中食七人 書陵本人作八。

佐史除吏也 各本史作吏。

○万章問曰至其義一也

献子魯卿 書陵本内閣本卿作郷。五人屈礼而就也 各本就

下有之字。亥唐晋賢人也 書陵本内閣本無也字。隱居陋巷

者平公常往 書陵本内閣本巷作巷、者下有晋字、常作嘗。

非王公尊賢 各本公下有之字。

礼謂妻父曰外舅 書陵本内閣本舅作勇。卒与之天位 書陵

本内閣本卒作率。

○万章曰敢問至公養之仕也

今尊者賜己 各本已作之。言可受也 書陵本内閣本作蓋言

其可受。

其交以道其餽也 各本交下有也字。

以礼道来接己 各本来下有交字。

凡民罔不諫 梵舜本內閣本罔作罔。

疆求猶禦人也 東洋本書陵本內閣本疆作疆。

將比今之諸侯 書陵本內閣本侯作侯。

孟子謂萬章曰 慶大本子作之。 尽誅今之諸侯乎 慶大本侯

作侯。 殷之衰亦猶周之末 書陵本內閣本末作末。 武王不

誅殷之諸侯 慶大本侯作侯。 孟子曰孔子所仕者欲事行其道

書陵本內閣本同 各本事作仕。 孔子欲仕道 各本仕作

事。 不可卒暴改辰 書陵本內閣本卒作率。 占其事始 書陵

本內閣本占作古。 魯卿季桓子 慶大本書陵本內閣本卿作

鄉。 故見之也 書陵本內閣本無之字。 養孔子故 書陵本內

閣本重孔子二字。 宿留以答之矣 書陵本內閣本無之字。

△章指▽淹久 書陵本內閣本淹作潦。 仲尼 書陵本內閣本

尼作厄。

○孟子曰仕至而道不行恥也

仕非為貧也 書陵本內閣本貧作貧。

有時乎為貧 書陵本內閣本貧作貧。

為貧者辭尊 書陵本內閣本貧作貧。

為貧之仕 書陵本內閣本貧作貧。 辭尊貧者 各本貧作富。

孔子嘗以貧而祿仕 書陵本內閣本貧作貧。 不得高言 書陵

本內閣本不作下。 △章指▽処卿相 慶大本卿作鄉。

○萬章曰士之至尊賢者也

非諸侯敵体 書陵本內閣本同。 各本体作礼。 比失國諸侯

慶大本侯作侯。 孟子曰魯繆公時 松方本時作特。 子思以君

命煩故 書陵本內閣本以下有為字。 於卒者末後復來時也

書陵本內閣本卒作率。 未作末。 後知君犬馬 書陵本內閣本

犬作大。 伝曰僕臣台 慶大本台作壹。 有悅賢之意 書陵本

內閣本悅作稅。 豈可謂能悅賢也 書陵本內閣本悅作稅。 僕

僕煩猥貌 慶大本猥作僂。 △章指▽不弘也 各本無也字。

○萬章曰敢問至其官召之也

不見諸侯何義也 慶大本侯作侯。

不肯往見何也 書陵本內閣本肯作旨。

且君之欲見之 內閣本且作旦。

天子不召師 書陵本內閣本師作帥。

齊景公田 書陵本內閣本齊作齋。

旌注旄首者 各本注作註。 閉其門何得而入乎 各本何作

可。

周道如底 各本底作底。 注文底字做此。

君子所履 書陵本履作履。 注文履字做此。

俟侍也。松方本書陵本內閣本俟侍。有當職之事。各本當作官。君以其官召。書陵本內閣本官作名。賢者無位。書陵本內閣本者作人。△章指▽伊尹。慶大本伊作尹。未洽。書陵本內閣本洽作治。

○孟子謂萬章曰至是尚友也

一鄉之善士。敕版東洋本同。各本鄉作卿。下鄉字亦做此。

鄉一鄉之善者。松方本二鄉皆作卿。梵舜本下鄉作卿。書陵本內閣本上鄉作卿。△章指▽無友。內閣本無作母。各本無作母。

○齊宣王問卿至不聽則去

王問何卿也。書陵本內閣本卿作鄉。貴戚之卿。慶大本卿作鄉。異姓之卿如之何。慶大本何下有問字。各本何下有也字。松方本梵舜本卿作鄉。異姓之卿諫君。書陵本內閣本卿作鄉。三而待放遂不聽之。書陵本內閣本同。各本遂作逐。

孟子卷第十 慶大本東洋本松方本梵舜本在第一九葉表第六行。

書陵本內閣本在第一六葉裏第七行。勅版在第二九

葉表第五行。

告子章句上 各本無趙氏注三字。勅版告子章句上五字低二格。

慶大本告子章句上下底五格有凡二十章四字。東洋本松方本梵舜本書陵本告子章句上下底六格有凡二十章四字。內閣本告子章句上下底七格有凡二十章四字。

○告子章句上

性命之難言 各本無之字。

○告子曰至必子之言夫

詩云北山 各本云作曰。子能順完 東洋本松方本梵舜本子作所。孟子言以人身 各本言作曰。夫歎辭也。慶大本東洋本松方本梵舜本歎作嘆。△章指▽告子道偏 書陵本偏作倫。

○告子曰至其性亦猶是也

今夫水搏 慶大本搏作博。

○告子曰至人之性與

無異性也 各本無也字。

白玉之白與 書陵本內閣本同。各本與作歟。

玉性堅 書陵本內閣本玉作王。

猶人之性與 各本與作歟。

犬之性 書陵本內閣本犬作大。

○告子曰至者灸亦有外与

見於外也 各本外下有者字。

異於長人之長与 書陵本内閣本同·各本与作歟。

且謂長者義乎 慶大本且作且。

敬老者已也 各本敬上有且字。故曰外 各本外下有也字。

者灸亦有外与 書陵本内閣本同·各本与作歟。

情往敬之 各本往作性。

○孟季子問至飲食亦在外也

鄉人長於伯兄 敕版東洋本同·各本卿作鄉。

先酌誰 各本作誰先酌。

先酌鄉人 勅版東洋本同·各本鄉作卿。

当先鄉人 慶大本書陵本内閣本鄉作卿。所酌者鄉人也 慶

大本松方本鄉作卿。

公都子不能答 書陵本内閣本公作分。

惡在其敬叔父也 書陵本内閣本父作公。

敬在鄉人 東洋本勅版同·各本鄉作卿。

故敬之鄉人在賓位 各本人下有以字·慶大本松方本梵舜本

書陵本内閣本鄉作卿。敬在鄉人也 各本無也字·松方本梵

舜本鄉作卿·書陵本内閣本敬作在、鄉作卿。敬之果在外

梵舜本書陵本内閣本在作敬。△章指▽公都 各本作公都

子。

○公都子曰至好是懿德

幽厲 慶大本厲作厲。

且以為君 内閣本且作且。

与微子比干 書陵本内閣本干作于。

彼皆非与 各本与作歟。

孝經曰 各本曰作云。故人之善惡 慶大本善作喜。

民之乘夷好是 各本夷作彝·下經文夷字做此。

人皆有善也 各本作人皆有是善者也。

○孟子曰富歲至悦我口

人之子弟也 各本也作言。詩云詒我来粢 各本詒作貽。雨

沢有不足 各本足下有如字。蓋体類与人同 各本蓋作故。

其性与人殊 書陵本内閣本人作入。

目之同耳 各本耳作也。如芻豢之悦口 各本無如字。草牲

曰芻 梵舜本書陵本内閣本性作性。△章指▽所以 書陵本

内閣本以作而。

○孟子曰牛山至惟心之謂与

牛山未嘗盛美 各本未作木。

且且伐之 書陵本內閣本且且作且且。

可以為美乎 各本無以字。

平且之氣 松方本且作且。

相近也者幾希 勅版同·各本無者字。

其日夜之思 梵舜本內閣本日作日。平且之志氣 松方本書

陵本且作且。且昼昼日也 松方本書陵本內閣本且作且。其

日夜之所息也 書陵本內閣本其作未。利害于其心 各本于

作于。未嘗有善才性 書陵本內閣本未作未。

莫知其鄉 勅版東洋本同·各本鄉作卿。

則在縱之 各本在作存。

○孟子曰無或至非然也

王之不智也 松方本也作之。

草木五穀 內閣本五作十。暴温之十日 內閣本十作五。或

曰圍碁 書陵本內閣本圍作□。△章指▽十人惡之 各本十

作一。濟濟多士 慶大本松方本書陵本土作土。

○孟子曰魚我至失其本心

死亦我所惡 松方本亦作生。

乞人不絜之 各本絜作潔。

不辯禮義 勅版書陵本內閣本同·各本辯作辨。

万鍾於我何加焉 書陵本內閣本鍾作鐘。

至於万鍾 書陵本內閣本鍾作鐘。不復辯別 慶大本辯作弁

·松方本書陵本內閣本辯作辨。鍾量器也 慶大本同·東洋

本松方本梵舜本無器字·書陵本內閣本鍾作鐘、無器字。

鄉為身死 勅版東洋本同·各本鄉作卿·下經文鄉字做此。

鄉者不得簞食 慶大本書陵本內閣本鄉作卿。△章指▽万鍾

書陵本內閣本鍾作鐘。

○孟子曰至求其放心而已矣

無他 勅版慶大本松方本同·各本他作佗。

所以求之 各本之下有矣字。△章指▽其末 書陵本內閣本

未作未。

○孟子曰今有至不知類也

△章指▽不鄉於道 東洋本同·各本鄉作卿。

○孟子曰拱把之桐梓

△章指▽違務 各本違作遠。

○孟子曰人之至尺寸之膚哉

養相及也 慶大本及作反。

体有貴賤有大小 各本大小作小大。

為大人 各本人下有故也二字。梧桐檟梓 書陵本內閣本檟

作積。酸棗 梵舜本書陵本內閣本棗作棘。亦為懷道者也
各本懷下有其字。

○公都子問曰至大人而已矣

從其大体為大人 梵舜本書陵本內閣本下大作小。

情性先立 慶大本性作牲。

○孟子曰有天爵者至必亡而已矣

人爵從之 書陵本內閣本從作徒。

終必亡之 各本之作也。

○孟子曰欲貴者至人之文繡也

弗思耳 勅版耳下有矣字。

凡人之所貴富 各本富下有貴字。人所自有者 各本人下有

之字。他人不能 東洋本他作佗。不願人膏梁 各本人下有

之字。△章指▽君子貧 書陵本貧作貪。

○孟子曰仁之勝不仁也

終必無仁矣 各本無作亡。△章指▽不卒 書陵本內閣本卒

作率。

○孟子曰五穀者種之美者也

不成不如 各本成下有則字。

○孟子曰羿之至亦必以規矩

志於穀 書陵本內閣本穀作穀。注文穀字做此。

弩向包的者 各本無包字。

孟子卷第十一 慶大本東洋本松方本梵舜本在第二〇葉表第七行

· 書陵本內閣本在第一七葉裏第八行· 勅版在第三九葉表第

五行。

孟子卷第十二

告子章句下

趙氏注

各本無趙氏注三字· 勅版告子章句下五字低二格· 慶大本告

子章句下下低五格有凡一十六章· 東洋本松方本梵舜本書陵

本內閣本告子章句下下低六格有凡一十六章。

○任人有問至則將摟之乎

不節其數 書陵本節作等。高於山耶 各本耶作邪。金重於

羽耶 各本羽下有謂多退同而金重耳一帶鉤之金豈重一車羽

十八字、耶作邪。何翅食色重哉 書陵本內閣本翅作翹· 慶

大本食作金。△章指▽偏殊 各本偏作偏。

○曹文問曰至有余師

為有力人矣則 各本矣下有然字。

拳百鈞百鈞三千斤也 各本不重百鈞二字· 內閣本鈞作鉤。

是為烏獲。松方本烏作鳥。內閣本鳥作為。

堯舜之道孝弟而已矣。勅版弟作悌。

堯言行義之言。各本行作仁。為桀似桀。書陵本內閣本似作

以。△章指▽不為。松方本書陵本為作無。一言以蔽之。各

本之作也。

○公孫丑問曰至五十而慕

小弁小人之詩也。勅版弁作辨。下做此。

無佗疏之也。各本佗作他。下做此。

垂涕泣。松方本書陵本垂作乘。

何辜於天。各本於作于。書陵本天作大。△章指▽生之膝下

松方本書陵本下作不。內閣本膝作滕。

○宋輕將之楚至何必曰利

君臣父子兄弟終去。書陵本君作若。

○孟子居鄒至得之平陸

季任任君季弟也。內閣本上季作委。居守其國也。松方本書

陵本居作君。致幣帛之禮。各本無帛子。以交孟子而未答也

各本而上有受字。松方本書陵本文作父。

佗日由鄒之。各本佗作他。

見季子由平陸。書陵本季作李。

故我不見也。松方本書陵本見作地。但遊交札。各本遊作

遙。△章指▽或不。各本不作否。答以。各本答作各。

○淳于髡曰衆人固不識也

齊之辯士。書陵本內閣本辯作辨。嘗勉此三卿之中。慶大本

卿作鄉。見貢於桀。各本貢作責。復貢之貢字做此。

髡未嘗覩之也。書陵本內閣本未作末。

在北流河之西。慶大本北作比。故曰勉於淇。各本於淇作淇

水。其妻哭之。書陵本內閣本哭作笑。下哭字做此。崩國俗

化之則效其哭。各本無俗化之則四字。故謂之無賢者也。各

本無無字。

以為為無禮也乃孔子。書陵本內閣本無禮作禮無。乃作及。

欲以微罪。書陵本內閣本微作微。

燔灸芬芬。書陵本內閣本芬芬作芥芥。出適佗國。各本佗作

他。乃聖人之妙旨。書陵本內閣本旨作肯。△章指▽見機

松方本機作幾。各本機作幾。庸人不識。書陵本內閣本識作

誠。雖辯。書陵本內閣本辯作辨。

○孟子曰五霸至諸侯之罪人也

天子適諸侯。慶大本侯作侯。

諸侯朝於天子。慶大本侯作侯。書陵本內閣本侯作侯。

入其疆土地辟 勅版內閣本同。各本疆作疆。
入其疆土地荒 慶大本松方本內閣本疆作疆。

諸侯伐而不討 書陵本內閣本侯作侯、伐作代。

搜諸侯以伐諸侯 書陵本內閣本二侯共作侯。

誅不孝 書陵本內閣本孝作存。

束縛其牲 書陵本內閣本牲作狂。不復敵血 書陵本內閣本

敵作軟。敬老愛少 各本少作小。賓客羈旅 慶大本書陵本

客作容。無敢違王法 慶大本王作玉。無以私恩 慶大本松

方本恩作思。

○魯欲使慎子至志於仁而已

不容於堯舜之世 內閣本容作客。

不足以待諸侯諸侯之 慶大本書陵本內閣本二侯共作侯。

且仁者不為 慶大本且作且。

△章指▽既其用兵 各本既作賤。

○孟子曰今之至不能一朝居也

君不鄉道 勅版東洋本同。各本鄉作卿。下鄉字做之。

○白圭曰至大桀小桀也

万宝之邑 各本邑作國。

無諸侯幣帛 書陵本內閣本侯作侯。

貉在北方 慶大本梵舜本北作比。黍早熟 書陵本內閣本黍
作黎。

且不可以為國 慶大本且作且。

況無君子乎 書陵本子作予。

△章指▽裔土簡惰 各本土作王。

○白圭曰至吾子過矣

○孟子曰君子不亮惡乎執

○魯欲使樂正子至國欲治可得乎

有智慮乎 各本智作知。

佗人之言 各本佗作他。

國欲治可得乎 書陵本內閣本得作行。

不肯就之則 書陵本內閣本肯作旨。△章指▽雨雪 慶大本

雨作兩。

○陳子曰至免死而已矣

迎之致敬 慶大本致作政。

矜其困而 各本困作國。窮餓而去不疑也 各本餓作饑。

△章指▽備此 各本備作漏。

○孟子曰舜發至死於安樂也

行弘亂其所為 松方本行作不。

管夷吾 各本作管仲。自魯囚執於士官 松方本囚作四。隱於都市而以為相也 各本市下有穆公舉之於市六字。驕慢荒忽 各本忽作怠。故知能生於憂患 慶大本故知作知故。安樂怠惰 書陵本怠作息。

○孟子曰教亦多術

予不屑之教誨也 慶大本屑之作之不。

我不絜其人之行 內閣本絜作潔。

孟子卷第十二 慶大本東洋本松方本梵舜本在第二〇葉裏第七行

• 書陵本內閣本在第一八葉表第八行・勅版在第四九葉表第三行。

四九葉表第三行。

孟子卷第十三

趙氏注

尽心章句上 各本無趙氏注三字・勅版尽心章句上五字低二格・

慶大本東洋本松方本梵舜本書陵本內閣本尽心章句上五字下

低六格有凡四十六章五字。

○尽心章句上

北辰也 慶大本北作比。拱之 各本拱作共。

○孟子曰尽其至所以立命也

所以事天也 松方本以作而。

終無二心改易 松方本心作六。△章指▽歿壽禍福秉心 慶大本歿壽作壽心、心作歿。

○孟子曰莫非非正命也

惟順 書陵本惟作性。為得正命也 書陵本內閣本為作無。

○孟子曰求則至求在外者也

○孟子曰万物至求仁莫近焉

忠恕之道 書陵本內閣本恕作怒。△章指▽恕已而 書陵本

內閣本恕作怒。

○孟子曰行之而不著焉

△章指▽以為道 各本無以字。

○孟子曰人不至無恥矣

○孟子曰恥之至何若人有

○孟子曰古之至得而臣之乎

況得而臣之乎 松方本之作以。

隱各有方 各本万作方。

○孟子謂宋句踐至兼善天下

孟子曰 松方本作子孟曰。

○孟子曰待文王而後興者

凡民無異知 慶大本異作自。乃能自興起 書陵本興作与。

○孟子曰附之以韓魏之家

六鄉之富者也 慶大本卿作鄉。

○孟子曰以佚道至不怨殺者

佚道 勅版同·各本佚作迭。

○孟子曰霸者至豈曰小補之哉

○孟子曰仁言至善教得民心

○孟子曰人之至達之天下也

知敬凡 各本凡作兄。△章指▽恕乎己也 書陵本內閣本恕

作怒。

○孟子曰舜之至莫之能禦也

○孟子曰無為其所不為

○孟子曰人之至深故達

德慧術知 勅版同·各本知作智。

○孟子曰有事至而物正者也

正己 慶大本正作止。△章指▽容悅 書陵本內閣本容作

客。

○孟子曰君子至不與存焉

△章指▽覽人能之 各本能作前。

○孟子曰庀土至不言而喻

君子樂之 書陵本內閣本之作不。

謂性仁義也 書陵本性作惟。

雖窮居不損 書陵本內閣本損作指。

匡國之綱 書陵本內閣本綱作網。而知之也 各本無之字。

仁義禮智 松方本智作皆。

○孟子曰伯夷至此之謂也

○孟子曰易其至有不仁者乎

聖人治天下 慶大本人作入。

如水火而民 勅版同·各本而作則。

○孟子曰孔子至不成章不達

○孟子曰雞鳴而起

○孟子曰楊子至廢百也

○孟子曰飢者至不為憂矣

○孟子曰柳下惠

○孟子曰有為者

△章指▽論之一簣 各本之作語。

○孟子曰堯舜至其非有也

五霸若能 各本若作方。△章指▽假借 書陵本借作備。

○公孫丑曰至則篡也

予不狎于不順。慶大本予作子。

大臣 各本作人臣。

○公孫丑曰孰大於是

伐檀之篇也。松方本之作而。謂之素餐。松方本素作索。

△章指▽素餐之謂也。各本無也字。

○王子塾問曰至大人之事備矣

志之所尚。各本無之字。

○孟子曰仲子至奚可哉

△章指▽有大小。各本大小作小大。

○桃應問曰至樂而忘天下

傲蹤。書陵本內閣本蹤作蹤。

○孟子自范之齊

謂諸弟子。各本無諸字。氣高居卑。松方本書陵本內閣本卑

作早。若供養之移。書陵本若作子。豈非盡是人之子也。各

本豈作皆。

○孟子曰王子至居相似也

以城門。松方本城作域。

○孟子曰食而弗愛豕交之也

○孟子曰形色天性也

君子體貌。書陵本內閣本體作禮。妖麗之容。書陵本內閣本

容作客。

惟聖人。書陵本內閣本惟作性。

不言居色主名。各本色主名作而言踐。

○齊宣王至弗為者也

徐之為差者。書陵本內閣本差作差。

○孟子曰君子至所以教也

△章指▽聖所不倦。各本所作人。

○公孫丑曰至能者從之

大高遠。各本大作太。自勉也。書陵本內閣本自作也。也作

自。新學拙射。書陵本內閣本射作射。

變其數率。書陵本內閣本數作數。下數字皆傲此。

○孟子曰天下有道

○公都子曰至滕更有二焉

滕更之在門也。松方本書陵本內閣本滕作滕。

滕更有二焉。慶大本松方本滕作滕。

凡侍此五者。書陵本侍作侍。△章指▽貴乎。各本乎作乎。

○孟子曰於不可已而已者

進不肖。書陵本內閣本肖作背。

○孟子曰君子至仁民而愛物

不知人仁 各本作不得与人同。

弗親 勅版弗作不。

先視其親戚 各本視作親。

○孟子曰知者至謂不知務

孟子卷第十三 慶大本東洋本松方本梵舜本在第二十二葉裏第六

行·書陵本內閣本在第十九葉裏第八行·勅版在

第五十八葉表第七行。

孟子卷第十四

趙氏注

尽心章句下 各本無趙氏注三字·勅版尽心章句下五字低二格·

慶大本東洋本松方本梵舜本書陵本內閣本尽心章句下低六格

有凡三十八章五字。

○孟子曰不仁至及其所愛也

王政不偏 各本偏作徧。有災傷加所愛之臣民 各本加所作

所親。恐士卒少 書陵本內閣本卒作率。△章指▽著此魏王

各本無此字。

○孟子曰春秋無義戰

毫毛 各本毫作豪。織芥 各本芥作介。

○孟子曰尽信書則不如無書

誅討 各本討作紂。武王以至仁伐 梵舜本武作成。兩三簡

策 書陵本內閣本兩作雨。△章指▽嵩高 各本嵩作崧。

○孟子曰有人至焉用戰

虎賁綴衣趣馬 各本綴作贅。安正爾也 各本正作止。犀至

地稽首 各本作額角犀厥地稽首。△章指▽若早望雨 慶大

本兩作兩·松方本內閣本早作早·書陵本早作早、雨作兩。

○孟子曰梓匠輪輿

惟度 各本惟作準。

○孟子曰舜之飯糗茹草也

以協音律也 各本無音字。自當有之也 各本有下有音字。

○孟子曰吾今而後知殺人親之重也

○孟子曰古之為閔也將以禦暴

○孟子曰身不行道不行於妻子

不肯行之 慶大本肯作旨。

○孟子曰周于利者凶年不能殺

○孟子曰好名之人能讓千乘之國

子臧 各本作伯夷。

○孟子曰不信仁賢則國空虛

○孟子曰不仁而得國者

其世有土。慶大本東洋本松方本土作上。梵舜本書陵本內閣本土作士。天下元子。各本下作子。△章指▽梵舜本作指章。

○孟子曰民為至則變置社稷

君輕於社稷。慶大本君輕作輕君。

得乎諸侯。書陵本內閣本侯作俟。

諸侯封以為大夫。各本封作能。

犧牲。勅版牲作性。

既絜。勅版書陵本內閣本絜作潔。注文絜字做此。

○孟子曰聖人至況於親炙之者乎

柳下惠之厚。各本厚作和。懦弱。書陵本內閣本懦作懦。踰

聞尚然況親見熏炙者也。各本踰作論。況下有於字。△章

指▽柳下。各本下下有惠字。

○孟子曰仁也者人也

○孟子曰孔子之去魯曰遲遲吾行也

說已見上篇。各本作註義見萬章下首章。

○孟子曰君子之居於陳蔡之間

君子之道。各本作君子道者。

○貉稽曰至文王也

仕者也。慶大本者也作也者。

○孟子曰賢者以其昭昭使人昭昭

孟子曰。書陵本子作予。

亂潰之政也。慶大本潰作潰。

○孟子謂高子曰山徑之蹊

鄉道而未明。慶大本鄉作卿。

○高子曰至兩馬之力与

蠹蠹欲絕之貌也。各本不重蠹字。無也字。

○齊饑陳臻曰其為士者笑之

卒為善士。書陵本卒作率。

卒後也。書陵本內閣本卒作率。人欲復使我。各本人作今。

○孟子曰口之至不謂命也

四枝四枝解倦。各本二枝字共作肢。好礼敬。各本礼下有者

得礼四字。

○浩生不害問曰至四之下也

不可知之。各本之下又有之字。

己之所欲乃。各本所作可。不意不信也。各本意作億。

○孟子曰逃墨至又從而招之

持札因云笙長四尺
 謂之管小者謂之
 和郭璞有雜云二
 十三管為籥風
 作通云并竹
 籥以象鳳翼用
 其笙師數吹箏
 後鄭云箏六管
 有三孔是也
 音聲者與音者蓋
 鍾聲者亦以其也
 之學出故云音也
 箏車馬言音以
 其音之雜比故云
 音也箏車馬亦
 謂之音者蓋升
 車則馬歎則和

王與少人共聽樂樂也邦曰不若與眾王言不若與眾
 與眾人共聽樂樂也
 人共聽臣請為王言樂孟子欲為王陳獨今
 樂樂也
 王鼓樂於此百姓聞王鐘鼓之聲管籥之音
 舉疾首蹙頰而相告曰吾王之好鼓樂夫何
 使我至於此極也父子不相見兄弟妻子離
 散鼓樂者樂以鼓為節也管籥箏蕭或曰箏若笛短而有二孔詩云左手執籥以節眾
 也疾首頭痛也蹙頰愁貌言王擊鼓作樂發賦徭役皆出於民而德不加之故使百姓愁

孟子卷之二

二

圖 I 慶應義塾圖書館藏
 (一) 第 1 種 (A 種 a) 卷第 2, 第 2 葉表

王與少人共聽樂樂邪
 與衆人共聽樂樂也
 曰不若與衆
王言不若與衆
 人共聽
 臣請爲王言樂
孟子欲爲王陳獨樂與衆人樂之狀
 今
 王鼓樂於此百姓聞王鐘鼓之聲管籥之音
 舉疾首蹙頰而相告曰吾王之好鼓樂夫何
 使我至於此極也父子不相見兄弟妻子離
 散
鼓樂者樂以鼓爲節也管笙簫籥或曰籥若笛短而有三孔詩云方手執籥以節衆也疾首蹙頰也蹙頰愁貌言王擊鼓作樂發賦徭役皆出於民而德不加之以使百姓愁

圖 I 静嘉堂文庫藏 (松方本)

(口) 第 3 種 (A 種 b) 卷第 2, 第 2 葉表

官嘉祥是...
古先王之雅樂獨樂
虛氏則無益于治

舉也
奉公百姓而
答也

王與少人共聽樂樂邪曰不若與衆王言不

與衆人共聽樂樂也亦人之常情

人共聽樂樂也臣請為王言樂孟子欲為王陳獨

王鼓樂於此百姓聞王鐘鼓之聲管籥之音

舉疾首蹙頰而相告曰吾王之好鼓樂夫何

使我至於此極也父子不相見兄弟妻子離

散鼓樂者樂以鼓為節也管笙簫籥或曰籥
若笛短而有三孔詩云左手執籥以節衆

也疾首頭痛也蹙頰愁貌言王擊鼓作樂發
賦徭役皆出於民而德不加之故使百姓愁

圖 I 静嘉堂文庫藏 (沢氏本)
(八) 第 4 種 (A 種 c) 卷第 2, 第 2 葉表

能盡大事之禮故止我也為我問
 孟子當何以服其心使信我也
 然友復之
 鄒問孟子孟子曰然不可以他求者也孔子
 曰君薨聽於冢宰歆粥面深墨即位而哭百
 官有司莫敢不哀先之也
孟子言如是不可用他事求也喪尚
哀惟當以哀戚感之耳國君薨委政冢宰大
臣嗣君但盡哀情歡粥不食顏色深墨深甚
也墨黑也即喪位而哭百官也
司莫敢不哀者以君先哀故也
 上有好者下
 必有甚焉者矣君子之德風也小人之德草

孟子卷五

圖 II 慶応義塾図書館蔵

(1) 第 1 種 (A 種 a) 卷第 5, 第 4 葉表

能盡大事之禮故止我也為我問
孟子當何以服其心使信我也
然友復之

鄒問孟子孟子曰然不可以他求者也孔子

曰君薨聽於冢宰歆粥面深墨即位而哭百

官有司莫敢不哀先之也
孟子言如是不可用他事求也喪尚

哀惟當以哀戚感之耳國君薨委政冢宰大臣嗣君但盡哀情歆粥不食顏色深墨深甚

也墨墨也即喪位而哭百官有司莫敢不哀者以君先哀故也上有好者下

必有甚焉者矣君子之德風也小人之德草

圖 II 靜嘉堂文庫藏 (松方本)
(口) 第 3 種 (A 種 b) 卷第 5, 第 4 葉表

朱子然者然其公我
民之言

冢宰周礼乃立冢官
冢宰使帥其屬而
掌所治以佐王治邦國
冢官冢宰掌邦治統
百官均海

能盡大事之禮、故止我也、為我問、然友復之、
孟子、當何以服其心、使信我也、

鄒問孟子孟子曰然不可以他求者也孔子

曰君薨聽於冢宰歆粥面深墨即位而哭百

官有司莫敢不哀先之也孟子言如是不可
用他事求也喪尚

哀惟當以哀戚感之耳國君薨委政冢宰大
臣嗣君但盡哀情歆粥不食顏色深墨深甚

也墨黑也即喪位而哭百官有
司莫敢不哀者以君先哀故也上有疑者下

必有甚焉者矣君身之德風也小人之德草

図Ⅱ 静嘉堂文庫藏 (沢氏本)

(八) 第4種 (A種c) 卷第5, 第4葉表

能自知蓋有諸中形於外也。孟子曰天下大悅而將歸已

視天下悅而歸已猶草芥也。惟舜為然舜不以天

下將歸已為樂號泣于天不得乎親不可以為久不順乎

親不可以為子舜盡事親之道而瞽瞍底豫

瞽瞍底豫而天下化瞽瞍底豫而天下之為

父子者定此之謂大孝舜以不順親意為非人子底致也豫樂也

瞽瞍頑父也盡其孝道而頑父致樂使天下化之為父子之道者定也。○章指言以天下

圖 III 慶應義塾圖書館藏

(1) 第 1 種 (A 種 a) 卷第 7, 第 19 葉裏

能自知蓋有諸
中形於外也
孟子曰天下大悅而將歸已

視天下悅而歸已猶草芥也惟舜為然舜不以天

下將歸已為樂號泣于天不得乎親不可以為人不順乎

親不可以為子舜盡事親之道而瞽瞍底豫

瞽瞍底豫而天下化瞽瞍底豫而天下之為

父子者定此之謂大孝舜以不順親意為非人子底致也豫樂也

瞽瞍頑父也盡其孝道而頑父致樂使天下化之為父子之道者定也○章指言以天下

圖Ⅲ 靜嘉堂文庫藏（松方本）

（口） 第3種（A種b）卷第7，第19葉裏

能自知蓋有諸
 中形於外也
孟子曰天下大悅而將歸已
 視天下悅而歸已猶草芥也惟舜為然
舜不
下將歸已為不得乎親不可以為人
樂雖泣于天不順乎
 親不可以為孝舜盡事親之道而瞽瞍底豫
 瞽瞍底豫而天下化
 父子者定此之謂大孝
舜以不順親意為非
人子底致也豫樂也
 瞽瞍頑父也盡其孝道而頑父致樂使天下
 化之為父子之道者定也○章指言以天下

図Ⅲ 静嘉堂文庫藏（沢氏本）
 （ハ） 第4種（A種c）卷第7，第19葉裏

圖 IV (一) 東洋文庫藏

第 2 種 (B 種) 卷第 3 第 5 葉表 (左) · 第 4 葉裏 (右)

恩惠之事半於古人而功倍之矣言今行之
易也 ○ 章指言德流之速過於置郵君子得
時大行其道是以呂望觀文王而陳

王圖管嬰雖勤猶為曾西所羞也
公孫丑

問曰夫子加齊之卿相得行道焉雖由此霸

王不異矣如此則動心否乎加猶居也丑問
孟子如使夫子

得居齊卿相之佈行其道德雖用此臣位而
輔君行之亦不異於古霸王之君矣如是寧

動心畏難自恐不能行否邪丑以此為
大道不易人當畏懼之不敢欲行也

曰否我四十不動心孟子言禮四十強而仕
我志氣已定不妄動心

有所畏也曰若是則夫子過孟賁遠矣丑曰若此
夫子志意

堅勇過孟賁賁勇士也孟子勇於德曰是不難哉乎先我不動

心孟子言是不難也告子之
勇未四十而不動心矣曰不動心有道

乎丑問不動心曰有孟子欲北常勳之養身之道云何

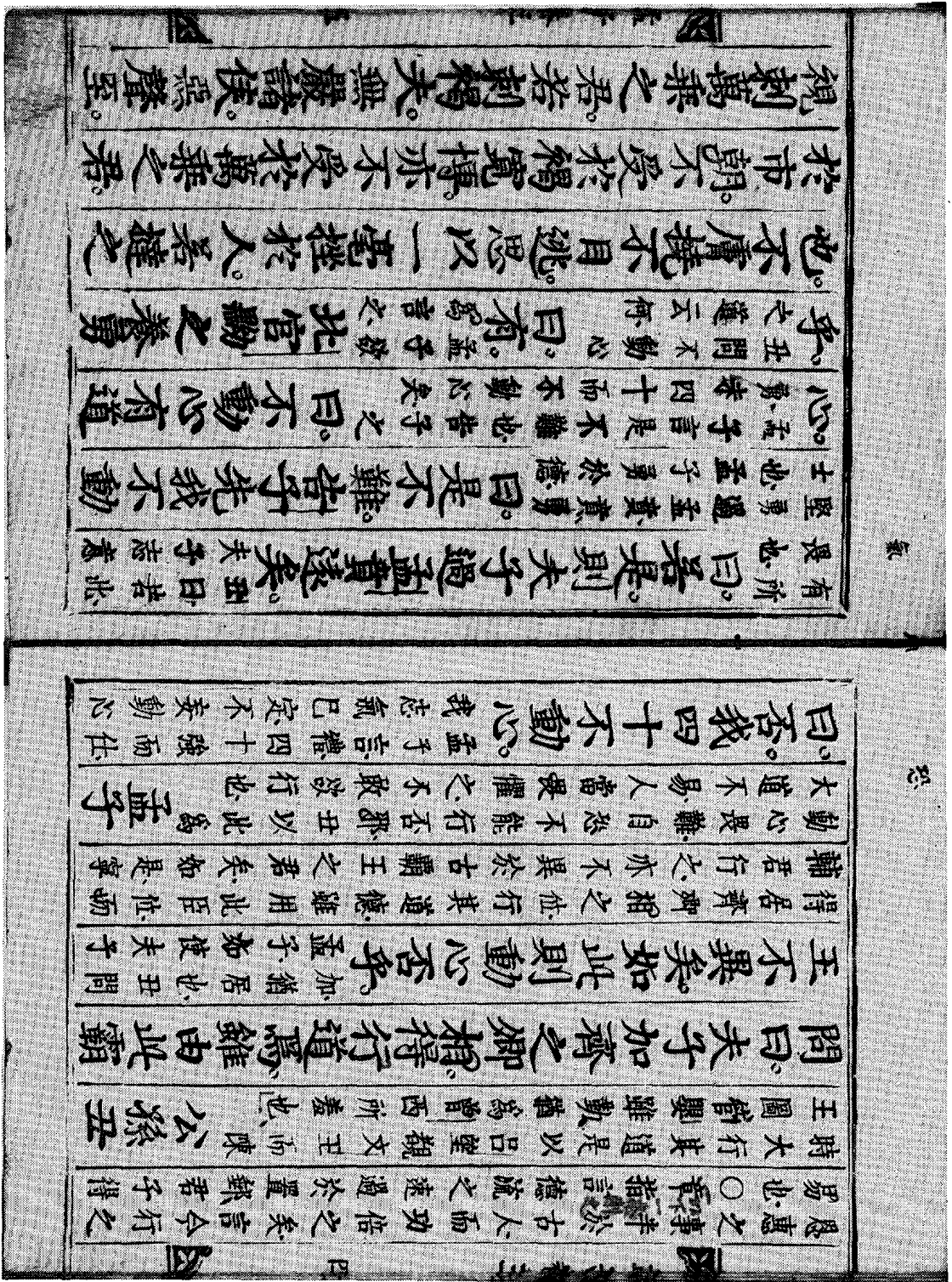
也不庸撓不自逃思以一毫挫於人者撓之

於市朝不受於得寬博亦不受於萬乘之君

視刺萬乘之君若刺褐夫無嚴諸侯惡聲至

圖 IV (口) 大谷大学図書館蔵

第2種 (B種) 修 卷第3 第5葉表 (左) · 第4葉裏 (右)



愚惠之肆詩於古人而功倍之矣言今行之

易也○指言德疏之遠過於置銀君子得

時大行其道是以呂望魏文王而陳

王圖節嬰雖數猶為曾西所差也

公孫丑

問曰夫子加齊之卿得行道焉雖由此霸

玉不異矣如此則動心否乎加猶居也丑問

得居齊卿相之位行其道德雖用此臣位而

輔君行之亦不異於古霸王之君矣如是寧

動心畏難自然不能行否邪丑以此為

大道不易人當畏懼之不取欲行也

孟子

曰否我四十不動心孟子言禮四十強而仕

我志氣已定不妄動心

有所畏也曰若是則夫子過孟賈遠矣丑曰若此

士也孟子勇於德曰是不難告子先我不動

心孟子言是不難也告子之曰不動心有道

乎丑問不動心曰有孟子欲此官賜之養勇

也之逢云何不膚撓不目逃思以一毫挫於人者撓之

於市朝不受於褐寬博亦不受於萬乘之君

視刺萬乘之君若刺褐夫無嚴諸侯惡聲至

氣

恐

第5種 (C種) 孟子題辭 第2葉表 (左) · 第1葉裏 (右)

圖 V (1) 內閣文庫藏

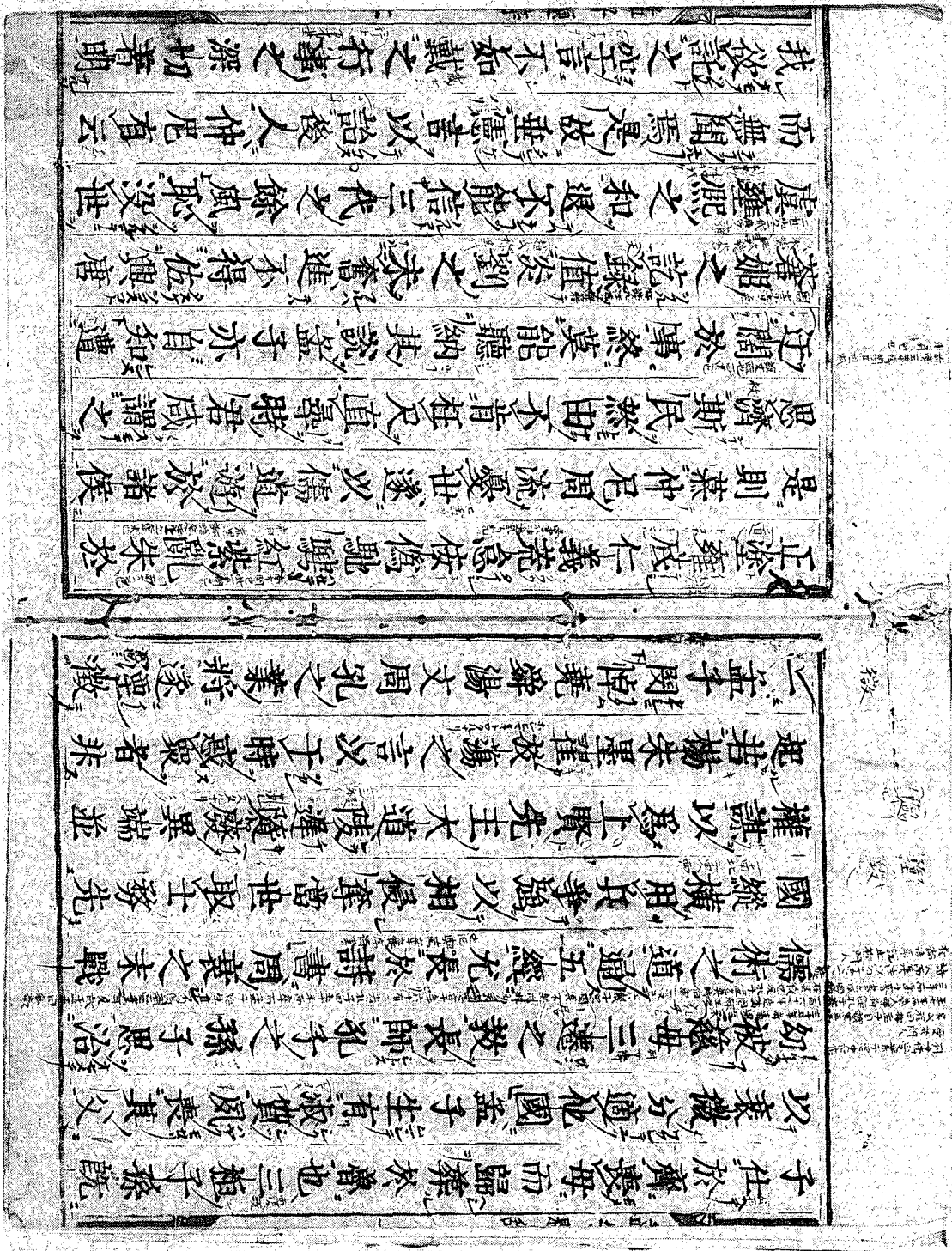


圖 V (口) 京都大学人文科学研究所蔵

第 5 種 (C 種) 修 孟子題辭 第 2 葉表 (左) · 第 1 葉裏 (右)

子仕於齊，襄母而歸葬於魯也。三桓子孫，况以萊微分適也。國孟子生有淑質，夙幼被慈母三遷之教，長鯁孔子之孫，子思浴儒術之道，通五經，尤長於詩書，聞襄之未戰，國縱橫，用兵爭強，以相侵奪，當世取士務於權謀，以為上賢先王大道，廢違，廢廢異端，並起若楊朱墨翟，放蕩之書，以干時惑亂者，非乙孟子聞悼堯舜湯文周孔之業，將遂溷微

正塗雍底仁義荒惑，佞偽馳騁，紅紫亂朱，於是則慕仲尼周流憂世，遂以儒道遊於諸侯，思濟斯民，然而不肯枉尺直尋，時君咸謂之迂闊於事，終莫能聽納，其說葦子亦自知遭蒼姬之訖錄，值炎劉之未奮，進不得佐興，唐虞雍熙之抱退，不能循三代之餘風，恥沒世而無聞焉。是故垂憲言以詒後人，仲尼有云：我欲託之空言，不如載之行事之深切著顯。

孟子見梁惠王孟子適梁禮請孟子見之王曰叟不

遠千里而來亦將有以利吾國乎曰辭也叟

也猶父也孟子去齊老而之魏故王尊禮之曰父不遠千里之路而來至此亦將有可以

為寡人與利除害者乎孟子對曰王何必曰利亦有仁

義而已矣曰孟子知王欲以富國強兵為利故曰可以必以利為名乎亦惟有仁義

之道者可以為名以利為名則有不王曰何以利

吾國大夫曰何以利吾家士庶人曰何以利

吾身上下交征利而國危矣征取也從王至庶人故言上下

圖VI 內閣文庫藏

(イ) 第5種(C種)卷第1, 第1葉裏

孟子見梁惠王 未注 引史
記云惠王三十四年早禮厚幣以
招賢者而孟軻至梁

仁 德名以愛為定語 曰仁者愛
人又曰克己復禮為仁 皇侃疏曰仁
善行大者孟子曰仁人也親親為大
義又曰博愛謂之仁

義 孟子曰義宜也
歸文云行宜謂之義伊藤仁行曰
宜其所當為之謂義
惠云君子之行當當守禮愛
當權禮而有餘理得處事之
宜以合于道是謂之義

孟子見梁惠王 禮請孟子見之 王曰叟不

遠千里而來亦將有以利吾國乎 曰辭也叟

也猶父也孟子去齊老而之魏故王尊禮之
曰父不遠千里之路而來至此亦將有可以

為寡人興利 孟子對曰王何必曰利亦有仁
除害者乎

義而已矣 曰何必曰利為名乎亦惟有仁義

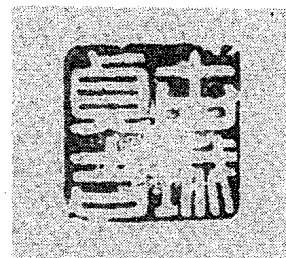
之道者可以為名以利為名則 王曰何以利

吾國大夫曰何以利吾家士庶人曰何以利

吾身上下交征利而國危矣 征取也從王至
庶人故言上下

圖 VI 京都大学附属図書館蔵

(口) 第 5 種 (D種) 卷第 1, 第 1 葉裏



坦堂文庫藏書印

禮記
經典釋文卷第十四

以宋板禮記釋文校勘
昭和五年四月
貞吉記

經二千七百二十四字

(經典釋文卷十四末)

史厚傳家詩書禮世子孫永保矣勿墮傳貞吉記



(毛詩明辨錄卷末)

古城貞吉自筆識語

墨翟之道 慶大本墨作黑。無親疏之別 慶大本疏作疎。

△章指▽正斯可矣 各本斯作則。

○孟子曰有布至而父子離

布軍卒 各本卒作率。△章指▽君子道也 慶大本也作子。

○孟子曰諸侯之宝三

諸侯正其封疆 慶大本正作王、疆作彊。松方村梵舜本書陵

本內閣本疆作彊。珠玉 書陵本內閣本玉作王。和民之璧

各本民作氏。隨侯之珠 書陵本侯作候。

○盆成括至殺其軀而已矣

△章指▽自私 慶大本自作身。

○孟子之滕至斯受之而已矣

之滕 慶大本滕作膝。

竊匿也 各本匿作慝。

夫子之設科也 東洋本同。各本子作子。

○孟子曰人皆至穿踰之類也

踰屋 書陵本內閣本踰作踰。

○孟子曰言近至自任者輕

舍身 慶大本舍作舍。大重自任大輕 各本二大字共作太。

○孟子曰堯舜至俟命而已矣

行其節邪 各本節下有操自不回四字。△章指▽俟終 松方
本書陵本內閣本俟作侯。

○孟子曰說大人至吾何畏彼哉

方一丈 各本無一字。從車千乘 梵舜本從作後。

○孟子曰養心至雖有存焉者寡

遇飢虎 內閣本遇作過。

○曾皙嗜羊棗至名所獨也

△章指▽情禮 松方本札作聖。各本札作理。

○万章問曰至斯無邪慝矣

其鄉党之士 松方本書陵本內閣本鄉作卿。不志其初 書陵

本不忘作忘不。故思之 各本之下有也字。論語曰師也僻

各本僻作辟。

不絜之士 勅版書陵本內閣本絜作潔。

其惟鄉原德之賊也 勅版東洋本同。各本二鄉字共作卿。

過孔子之門不入 梵舜本書陵本內閣本入作人。鄉原不入者

東洋本同。各本鄉作卿。

可謂之鄉原矣 勅版東洋本同。各本鄉作卿。

鄉原之惡 慶大本東洋本同。各本鄉作卿。

是鄉原也 勅版東洋本同。各本鄉作卿。

鄉原之人 東洋本書陵本同・各本鄉作卿。鄉原者外 東洋本同・各本鄉作卿。謂之鄉原也 慶大本鄉作鄰。

一鄉皆稱原人 勅版東洋本同・各本鄉作卿。

鄉原之人能匿 慶大本東洋本同・各本鄉作卿。若似廉絜

書陵本絜作潔。

惡鄉原 勅版東洋本同・松方本惡作恐、鄉作卿・各本鄉作卿。

鄉原惑衆 東洋本同・各本鄉作卿。皆孔子之所惡也 慶大

本皆孔作孔皆。△章指▽鄉原 東洋本松方本同・各本鄉作

卿。率而正 各本而作以。

○孟子曰由堯至則亦無有乎爾

△章指▽班垂文采 東洋本班作班。有遇不遇 內閣本下遇

作過。

孟子卷第十四 慶大本東洋本松方本梵舜本在第二三葉裏第六行

・書陵本內閣本在第二〇葉裏第五行・勅版作孟

子卷第十四終、在第六七葉表第四行。

孟子篇叙 各本無此一文・梵舜本東北大A種b本有補鈔異同如

左。

離婁之明 東北本無之字。孝道之本 東北本無之字。道之

極者也 梵舜本東北本無之字。終於尽心也 梵舜本東北本

無於字。璿璣 梵舜本東北本璿作璇。不敢比 梵舜本比作

此。故取其三時三時者 梵舜本其作於・東北本取其作於、

不重三時二字。成歲之要時 梵舜本無之字。亦無所法也

梵舜本東北本無無字。

旧鈔本趙注孟子校記(一)訂正補

二九〇頁下四行 本下↓本人下

三〇二頁下一八行 嬾↓賓

三一二頁上一、一二行「訂正」此項目削除

三一七頁上五行 商↓尚

三二一頁上一七行 于↓字↓干

三二五頁上一〇行 慄二字↓慄、粟↓粟

三二九頁下六行 已↓已

三三二頁下三行 已↓已

三三六頁上一六行 欲知示之意↓欲知示之意

伊佐早本八行本重之字↓此十字削除

三四一頁上一〇行 孟子曰↓孟子謂

三五五頁上四行 以↓火

三五九頁上一六行 待↓侍
三六三頁下一六行 文↓丈

旧鈔本趙注孟子校記(一)訂正

- 一六六頁上五行 者↓有
一七〇頁上一七行 大宰下空一格
一七四頁上一一行 齊吾↓齊至吾
一七五頁上一二行 助者藉也↓在君与子矣
一六行 此一行削除
一七七頁下一四行 日↓曰
一八一頁上一七、一八行 已五字↓已
下一八、一九行 慄二字↓慄、粟↓栗
一八二頁下三行 瘦↓廋
一九三頁下五行 徒↓從
一九八頁下一〇行 以↓火
二〇〇頁下二行 大↓本
二〇一頁下一三行 待二字↓侍